南方熊楠
宮武省三

往復書簡集　二

笠井純一

凡例

一、本稿は、南方熊楠と宮武省三の間に交わされた書簡のうち、大正十三年正月十五日から三月九日までの、現存する全書簡を翻刻するものである。

一、書簡は、なるべく原文通りに翻刻することに努めた。但し、解読の便をはかって句読点や括弧を補い、漢文に返り点を付した場合がある。

一、書簡中の資料引用は必ずしも正確でない場合があるが、原文のままとした。

一、漢字は原則として新字体・通行の字体を用いた。但し両者慣用の俗字や、出版・出板、大阪・大坂などの混用は統一せず残した場合もある。

一、ゟ（より）・ヒ（とも）・ヿ（とき）などの文字は、原型を生かした。

一、抹消された文字のうち判読できるものについては、左傍に〻印を付して表記した場合がある。

一、明らかな誤字には右傍に〔ママ〕を付し、脱字は〔　〕内に補った。

一、振りがなは、カタカナは原文のもので、ひらがなは編者の付したものである。漢字で表記された外国地名等に編者がカタカナの振りがなを付す場合には、これを〔　〕内におさめた。

一、外国語のカタカナ表記の読点は、中黒に改めた。

一、図面は原則として原位置においたが、文中に「＊」「＊＊」等の符号で示し、欄外に一括掲載した場合もある。

一、編者の註記は、各書簡の末尾に◇印で示した。

一、文中にはアジア諸国の呼称などに不適切な表現があり、不当な封建的身分差別を示す名辞も散見するが、資料集としての本稿の性格上、原則として訂正しなかった。

大正十三年

宮四（一月十五日付封書）

大正十三年一月十五日

先以て甲子新春目出度限に存じます。

年々形骸の衰ふるは致方なしとしても、日々精神は新に、是ばかりは念書人の特権かと越年毎に嬉敷存じます。扨て例の基金募集の件、成績思はしからず、第一回としてうるところは、

一、金拾円也　西村熊太郎　一、金五円也　高原穫郎
一、金壱円也　青山茂司　一、金壱円也　松村増男
一、金壱円也　長瀬兼四郎　一、金壱円也　日原謙吉
一、金壱円也　銅直澄太　一、金壱円也　有馬敬助
一、金五拾銭也　藤井敬三　一、金五拾銭也　足立吉章
一、金拾円也　私より　計参拾弐円也

に過ぎません。其他の勧誘先からは未だたよりが在りませんが、是等は後廻しとして、右だけを不二取敢一御送り届け致す事としました。素より零砕ですが、所謂貧者の一燈としてお納め下さいませば仕合に存じます。いづれ其内に又逢ふ人毎に根気よくあたつて見ます。

（植物俗談）正月飾に用ふる植物のうちで、私は橙が一番好きです。佐賀郡では、此飾に用られたる橙を、永く保存する慣習があります。其謂は、泥坊がくると、自然に此の橙が音を発して、家人を警しむといふ俗信があるからです。

筑前大宰府の鬼すべ（追難）のとき、鬼を警固する役の者（此宰府の追難は、上三町・下三町に別れて、上三町の者は鬼をふすべる役をなし、下三町の者は鬼を警固する役をつとめ、双方互に意地を張りて行事す）は、いづれも荒縄襷にて身を固め、大根又は橙を懐中し、中には此縄に此の二つを吊る者もあります。是は煙にむせるとき、此の大根又は橙を吸ふて難を免る用意に携帯するのです。拝観のとき非常に面白く思ひましたから一寸お知らせして置きます。俗事多端、本日は是で失礼致します。

宮武　拝

南方先生　侍史

二

南三（一月十七日付封書）

大正十三年一月十七日午後七時前

宮武省三様

南方熊楠
再拝

拝復　十五日付御状今朝九時拝受、貴殿始メ諸氏之御寄付金小為替二枚正ニ忝ク拝受、千万御厚礼奉二申上一候。乃チ領収証十一枚封入候間、ソレ〳〵エ御差上被レ下度候。是レハ印刷領収証纔カニ三十枚斗リ残リ、近日和歌山ら多数入金ノ節是ニテ足ラズ、因テ前々ト同型ノモノヲ作ラシムルニ震災ノ結果デ一寸鐫刻出来ズ、第一紙ガ調ハズト申ス。ソレガ出来上ル迄何トカ此三十葉斗リニテ用ヲ足シタクト存じテ也。第一八三号領収書トノ三十二円ノ印刷受領証ヲ貴殿ヘ差上ゲ、他十氏エノ分ハ第一八三号領収書ノ内訳ノ心得ニテ、ソレ〳〵小生自筆ノ領収書ヲ差上申候。本日ハ別ニ長崎県杵島郡西川登村ノ山崎トイフ人らモ寄付金被二贈下一候。此人ハ小生一向知ザル

人ニ御座候。

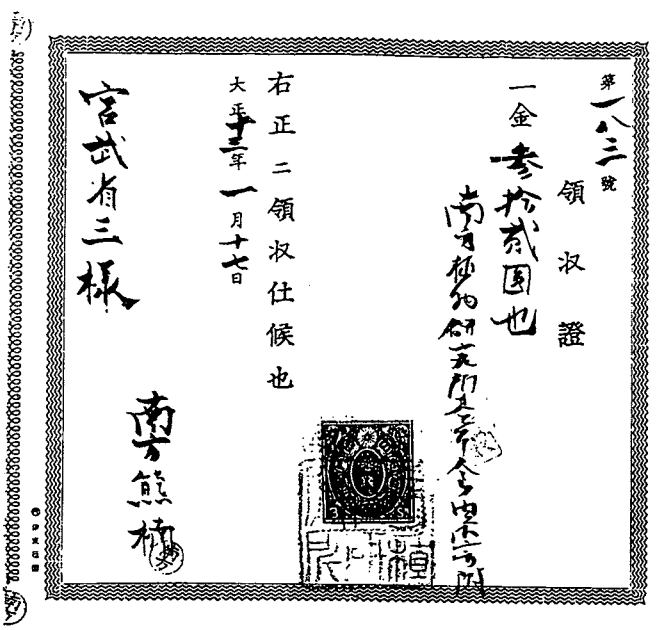
貴状前回ノ分ニ、四国ノ寺ノ鐘ヲ鋳成スニ、女人毎ニ髪一筋ト文銭一文ヲ乞得テ遂ニ成就セシトアル其ノ寺ノ在所・郡村名及ビ国名ヲ御知セ被レ下度候。是レハ小生共ニ頗ルヨキ心得トモナレハ、又後進輩ニヨキ訓戒ヲ相成可レ申候。

『土之鈴』ハ中々ヨキ雑誌ナリシモ、チト装釘図標ニ金ヲ入レスギシカト存候。廃刊ニ至リシハ惜ムベシ。一昨年在京中、中山太郎・折口信夫二氏と毎度面会、屢ハ此事ヲ語リ出候ニ、中山氏ハ随分柳田氏ノ『郷土研究』ノ続キ如キモノヲ出シ兼ザルモ、博文館ヵ、〃左様ニサレテハ館ノ方ノ事務ニ事カクヲオソル〃トイフ故障出候由、折口氏モ随分望ミナキニ非ルモ、是レ亦ナニカ故障ガ多少有ルラシカリシ、吾邦ニ、是レトイフ民俗学専門ノ雑誌無キ事遺憾ノ至リニ御座候。小生モヤヽ久シク植物研究ノ方ノ事ニ専ラカヽリ、民俗学ノ方ハ時々英国デ出スノミニ有レ之候。

ト一ハ一チトイフ事アリ。是レハ維新以後ノ詞ノ様ニ覚エ申候。小生幼時ナド更ニ聞カヌ語ナリシ。コレハ近時新聞ナドニ散見スルガ、何ノ事ニ候ヤ。尾佐竹猛ニ聞合セシニ、女二人ガ上下ニナリテ交互同時ニ陰部ヲ舐ル事ナリ。ト一ハ上、ハ一ハ六乃チ下ニテ上下トイフ義ナリト。又上松蓊氏（モト古川組ノ門司支店長タリシ人）説ニハ、此事ヲ行フト風評アル芸妓ナドニ色々ト問ヒシモ、此事斗リハ口外成ズトテ、更ニイハズ。何ノ事ヤラ更ニ別ラヌ由ニ申サレ候。小生モ随分ソノ方ノ本ヲ読ミシ事アルガ、徳川氏ノ世ノ書ニハ一向見エ不レ申候様也。

小生急ニ用事サシ起リ是ヵ医師方ヘ行ザル可ラズ、因テ右御受ケ御礼迄如レ斯申上候。

恐々謹言


第一八三號
領収證
一金 参拾銭国也
南方熊楠殿
右正ニ領収仕候也
大正十三年一月十七日
宮武省三様
南方熊楠

南方熊楠再拝

南四（一月十八日付封書）

大正十三年一月十八日午後二時

宮武省三様

拝啓　昨日ハ色々用事サシツカエ居タル為メ、本日高原・西村二君ヘノ御礼状相認メコヽニ同封候間、何卒便宜ヲ以テ御転送奉二願上一候。

九州ノ菌類及ビ粘菌ハ一向集マリ居ラズ、小生今少シク落着キ候上ハ、先ヅ一ト通リ其標品ノ大概ヲマトメ送リ可二申上一候間、ソレニ倣ヒ貴地方ノモノヲ御見当リノ節御採リ御送リ被レ下度、小生ハ一一其名ヲ申上ルト同時ニ之ヲ出板公表可レ致、又自分ニ決断シ兼候物ハソレ〳〵海外ノ知人名家ニ判断ヲ乞ヒ公表可レ致候。

敬具

其他ノ八氏エモ御礼状可二相認一処、小生急速ニ日限迄ニ認ムルヲ要スル原稿サシカサナリ有レ之、因テ五七日相ノバシ申候。

宮五（一月二十三日付封書）

大正十三年一月廿三日

玉章拝受致しました。御叮嚀に一々御領収書御同封並に一昨日西村並に高原両氏宛御挨拶状御寄越し下さいまして、却て恐縮千万に存じます。御忙しいなか、殊に御勉強の御邪魔ともなりますから、他の諸氏へは御見合可レ然、私より已に礼を申述べ置きましたのみならず、一同は却て先般の御領収書は余りに律義なりと痛入てゐる始末であります。

扨てト一ハ一が女同志の夫婦関係を意味する事は御承知の通りにて、此場合亭主役たるべき女を俗に男オンナと称し、伝法肌の女に多く、性慾にあき〳〵してゐるべき筈の遊女などにも案外、ト一ハ一の関係を結ぶ者あるを耳にしてゐます。家人の知合なる京都悉皆屋の婦人が曾て咄せる処に由れば、京都に相当の暮する家に娘あり、親は此娘を嫁にやらむとて衣装万端のこしらへせしに、此の娘いつのまにか、さる芸子とト一ハ一の関係を結び、此衣裳を親の知らぬ間に芸子へ貢ぎたる事発覚し、親は嘆きたることありと、而かしてト一ハ一の干係を結ぶと、其女は男が嫌になり、此の芸子の如きも最初は旦那ありしが、後には此の旦那をふり捨て、娘と同棲したと申しますが、閨中の秘術に就きては私も知らず、いづれ老人連にも訊ねお知らせ致します。近代ハイカラの徒は、性交をSixty Nineと称する者もある由にて、是は数字にて表はすと、69即ち〇が上下になるより言ふと曰へば(花柳界にては写真といふ。カメラの硝子に、原形が逆さまに撮るより聯想して通語となると)、ト一ハ一も尾佐竹猛氏の説の如きかと思ふも、玉門をなむと曰ふ実否は不明であります。すべて閨門の用語には不可解な言葉多く、曾て北野博美氏『性の研究』に御掲載の接吻に関する玉稿中「きたやま」とkissの呼ばるるをお書洩らしになつてゐる如う思ひましたが、是なども何故接吻が関西並に九州地方にても「きたやま」と称さるに至つたか、私は取調未済です。

咄は異ひますが、九州にては「四国攻め」といふ閨語があります。是なども老人よりヤツと耳にしたる処に由りますと、口、呂形をなし、一方の手にて女の乳首、他方の手にて陰唇を弄りつつ、歓楽するを言ふたものだそうです。

菌類採集の事、私にはよき学問となりますが、此方面は全然無知

識、惧く盲人のかき覗きに了るべく、先づ其前予備知識を得て置たいと思てゐますが、邦人の著書或は英人の著書にて、手ほどきとなるべき書目二三、御序の節御教示希上げます。

いつぞや『太陽』に御掲載の猿子眠に就て、山中露営に仰臥の禁物たる事をお咄在りましたが、此事は我国にても疾く実行せるものにて、即ち彦山の山伏の如きは、峯入のとき、先達は一同に仰臥を許さず、猿子眠の姿にて睡眠せしむる法にて、是を「カザル」と申します。笈を負たる侭眠る姿、雛節句の人形をならべたる飾物に似たるより申すのです。私は此山へは大正二年詣りたるのみにて、今一度登山、峯入の法を研究したいと思いながら機会なく、其侭にしてゐます。

土俗研究専門の雑誌なきは仰の通り、実に遺憾です。門司書店にきくに『郷土研究』をとりしは其当時私だけ、『民族と歴史』は数部で在つたと申しますから、如何に地味な此方面の研究が重ぜられぬかが判ります。しかし夫だけ、閑却せられるだけ、私自身としては後世此道に突進して行くつもりです。桂川氏は琉球より帰里せば、東京にて何か計画せらるゝ由、是非成功させたきものと切禱してゐます。

同氏は芸術肌にて凝性なるため、只さへ儲からぬ土俗研究雑誌に要らん入費をかけ、前轍をふむ憂なきかと私も気にしてゐますが、なんとかしてもりたてたきものと念じてゐます。本日は是にて失礼致します。

省三　拝

南方先生　侍史

南五（一月二十五日付封書）

大正十三年一月廿五日夜十二時前

宮武省三様

南方熊楠
再拝

拝復　廿三日付御状今朝着拝見、前日尋ネ上シ女ノ髪一条ト文銭一個ヅヽ集メテ鐘ヲ鋳シハ、何国何郡何寺ノ事ニ候ヤ、小生ニハ至極異聞也。又ソレハイツ頃ノ事ナリヤ、分リシ丈御知セ被レ下度候。

ト一ハ一ノ事御知セ被レ下難レ有御礼申上候。昔ゟ香火兄弟ナト申ス事唐時代ノ書ニモ相見エ、芸妓ナトニ此類ノ事アルハ推測ニ難カラザルモ、日本ニカヽル事アリシ明証ナク、例ノ江戸時代ノ軟文学ニモ春画ニモ見エズ候。タヾ一ツ北斎ニ類似ノ筆ニテ男女転倒ノ位置ニアリテ、女ハ男陽ヲ撫弄シ、男ハ顔ヲ頭ヲ女ノ肛門ニ向ケテ例ノ所ヲ舐ル所ノ図アリ、然し女ト女ニハ左様ノモノヲ見ズ候。又ト一ハ一トイフ事名ヲ書タルモノモ、小生渡外（明治十九）前ノモノニハ見及バズ、全ク近来ノ事ノ様ニ被レ存候。

四国攻メノコト、是レハアリソウナ事ニテ、春画ナドニモ多少似寄タモノ有レ之、又浄瑠璃ニモ古イ所ニソレラシキ事有レ之候。乳ヲイロハシテ快ヲ感スル事、欧洲殊ニ仏国デ屢バ聞クガ、日本ニハ少キ事ノ様被レ存候。乳房トイフモノハ、冬中之ヲ露ノ児ニ吸ハセテ風引ク事モナキ程脂肪多クカブリタレハ感覚乏シク、随テ快感少事ハナカルベキモ小生承ル所ハ、乳房ノ下ノ窪腺ヲ弄スレハ快ヲ覚ルモノヽ由。四国攻メノ意義ハ詳カナラネド、天正十三年秀吉公ガ長曾

我部征伐ノ時、秀長・秀次ヲノ阿波ニ入レ〆、浮田秀家ヲ讃岐ゟ、小早川隆景ヲ伊予ゟ攻入ラシメタノデ、元親モタマラズ纔カニ一月デ降伏シタ。全ク三面ゟ敵ニ伐チ入ラレタカラノ事ナリ。其如クロト乳ト彼処デ攻メ立テラル、カラ、四国征伐ニ因ンデ四国攻メト云フ事カト存申候。

菌学ノ予備書トイフ如キモノ邦書ニハ無シ、英書ニアレ〆本邦ノ事ニハアテハマラズ、故ニ全ク無用ナリ。小生ノ同志ハミナムヤミニ標品採集カラ始メ申候。

土俗研究ノ雑誌ハ、京都ノ田中緑紅トイフ人等ガ出ス『郷土趣味』トカイフモノ、一年間ホトタヾクレタ事アリ。然ルニ其人々アマリ郷土学ノ心得ナキ人ニテ、旧式ノ故実家ヤ随筆家ノ言ノ如キヲ因襲シタル斗リニ候。小生其内、此学ノ手引キ草（入門）如キモノヲ出板セント思フガ、何ニ様暇少ナキニハ閉口致シ候。今モ英国ニテハ毎度出シ居リ、今夜モ此状書キ了テ諫鼓ノ事ヲカクツモリニ御座候。ソレハ羅馬（ローマ）帝テオドシウスニ付テノ中世ノ伝説ニ、此帝目盲シテモ善政ヲ怠ラズ、鐘ヲカケテ冤訴アルモノハ遠慮無ク之ヲ挽キ鳴サシム。其音ヲ聞ケハ判官直チニ出来リテ其訴エヲ判ジヤル仕組ナリ。或ル〆蛇ガ其鐘ノ中辺ニスミシニ、天気ノヨキ日、蛇ガ其子ヲツレテ野遊ビニ出タ間ニ蟾蜍（ヒキガエル）ガ来リ、其巣ヲ領シ居ル（御存知通リ、西洋ニテハ古今共ヒキガエルヲ大毒トス）。因テ蛇ガ鐘ヲ鳴シテ判官ニ告ゲ、判官之ヲ帝ニ告ルト帝勅ノ蟾蜍ヲ誅シタノデ、報恩ノ為メ蛇ガ帝ヲ其寝牀ニ訪ヒ、珠ヲ以テ其眼ヲ撫ルト帝ノ盲眼ガ明イタトイフ。是レハ中世ノ教訓書トノ大ニ行ハレタゲスタ・ロマノルム（教訓書トイフモノ、吾国ノ『沙石集』ト同格ノモノデ男女間ノ笑話多シ）ニ載セタ所ダガ、最近客冬十二月十五日ノ随筆問答誌ニ出タノハ、小生ニハ耳新ラシイモノデ瑞西（スイス）ノ伝説ニシャーレマン大王ガ鐘楼ヲ建テ、右ノ如キ事アリ。扨蛇ガ大王ニ奉ツテ謝恩シタ玉ヲ持ツ人ハ、尤モ王寵ヲ厚ク受ルナリ。王ハ此玉ヲ后ニ与ヘシニ、ソレゟ王夫婦ノ間ダ中ヨキ事夥シ。是レ此玉ノ偉徳ト知テ、后臨終ノ時、死後他人ノ手ニ渡ツテ其人亦王ノ寵ヲ擅マヽニセン事ヲ妬ミ、玉ヲ自分ノ舌ノ下ニカクシテ死ダ。是レハ王ガ自分トノ兼言ヲ守ツテ死後復タ妻ヲトラヌベキ為メ也。后殂シテ、其尸ヲミイラニシ埋メタルヲ、大王命〆掘出サシメ十八年間ソノ尸ト同居ス。是レ其尸ノ中ニ希有ノ玉アル徳ニヨル事ト了ツタ侍臣有テ、ヒソカニ其尸ヲ捜ス ト果〆舌裏ニ玉アリ、其人之ヲ盗ミ持ツト大王此臣下ヲ愛スル事過度ニ〆、飽キガクル。因テ之ヲ或ル温泉近キ沼ニ捨ルト、王亦其沼ヲ愛スル事イト熱クナリ、其処ニアーヒエン市ヲ建タト云フ。此話ノ所因、若クハ類話ヲ求ムルニ、先ヅ冤訴アルモノニ鐘ヲ鳴サシメタトイフ事ハ、大正十年十二月ノ『太陽』一三八頁ニ小生筆シタ支那ノ諫鼓又告冤鐘ノ事ヲ、ドウモ伝ヘタラシク、然ルニ玉ヲモツモノガ君主ニ特寵サルト云フ件ニ至テハ和漢印度ニ之ト恰当セル話シハナシ。故ニコレハ東洋トハ別源ノ譚ト思フ。然シ類話ハ多少アリ。漸ク思ヒ出シタ所ヲ一二挙ルト、漢ノ某妃ノ化粧ノ間ヘイツモ蛇ガ玉ヲクワヘテ出ル。其蛇ノ蟠ツタナリガ毎朝カハル。ソノ次第ヲマネテ束髪ヲ結フト何トモ言ハレヌ妙相ヲ現ジ、他ノ諸妃ガイカニ其髻ヲマネブモ及ビツカナンダト云フ。コレタケテハ何ノ関係モナイ様ダガ、蛇ト玉ヲクハヘ来ルトハ右ノ欧洲談ニ合ヒ居リ、又此髻ガ諸妃ノ擬シ得ヌ美ハシイモノダツタトイフカラ、ツマリ此蛇ノオカ

ゲデ此妃ハ一生帝寵ヲ擅マヽニシタ事ニナルカラ一寸ヨクアヒ居ル。今一ツハ『酉陽雑俎』ニ、「何トカイフ玉デコシラエタ盃デ、水ヲノマバ目ノ痛ミヲ治ス」トアルノデ、コレハタヾ玉ガ眼ヲヨクスルトイフ事ダケガ似テ居ル。此外ニモ似タ事ガアリソウナモノト思ヘド一向思ヒ中ラズ。貴下モシナニカノ伝説又ハ稗史デ玉ヲモツモノハ人ニ最モ愛セラルト云フ事ト、蛇ガ報恩ニ玉ヲクハヘ来タトイフ事ト、眼見エヌヨクシタ玉ト、此三ツノ話シ御存知ナラハ御知セ被レ下度、小生貴下ゟ教ツタト明記ノ出し、出板ノ上此項ノ出タ分一冊可ニ差上一候。

蛇ガ恩ヲ報スル為メ珠ヲモチ来ツタトイフ事ハ『捜神記』ニ名高イ隋侯ノ珠ノ故事アリ。隋侯ガ斉ヘ之ク道中デ、小蛇ガ熱沙中ニ出血ノ苦ムヲ怜レミ、杖モテ水ノ中ニ投入レヤルト礼ニ玉ヲ持タ小児ニ化テ来リ、其玉ヲクレタ。其玉ヲ斉王ニ呈ノ厚禄ヲ受ケ、一生楽々ト暮シ得タトイフ事デ、大事ノ身ヲ小事ニ忘ルヲ隋珠ヲ雀ニ擲ツガ如シト貝原篤信ナドモ云ヘリ。此語ハ何ニ出ルカ不レ知。『佩文韻府』抔にアルベキカ。

玉デナク**ヒ**ナニカノ物ヲ持テ、ソレガ為メ人ニ愛サルヲ知タモノガ、其物ヲ盗ミ、ソレゟ盗ンダモノガ愛サレテ、其物ノ前ノ持主ハ愛サレザル様ニナルト云フ話位イハ本邦ニ多イ事ト思ヘド、サア今出セトナルト一寸出来ラヌモノニ御座候。

今朝貴状ト共ニ静岡県住、原摂祐氏（此人ハ世界ニ聞エタ菌学者ナレド小生同様自修強学ノ人デ一向不運ナリ）ゟ来信アリテ、芝川ノリトイフモノヲ贈リ来リ候。図ノ如キモノデ海ニ多キアヲサトイフモノニ酷似セルモノナリ。小生一寸見テ其ノPrasiola属ノモノタ

ルヲ知ル。加様ノモノ海ニ生スルハ極テ多ケレド、淡水ニ生スルハ甚少ナシ。多クハ急流ニ生ジ石ニ付ス。然ニ近頃ハ水力電気ノ用途多キ為メ生スル事マス〳〵少シ。此紀州ナドニハ一種モ見出サズ。昔しハ竜神ト申ス山間ニ一種アリシトキケド今ハナシ。モシ貴地方ノ淡水（塩気ナキ川、小川、堀、又小濱（ミツ）、急湍、滝等）ニ此様ノモノアラバ、トリテ厚キ紙ニノセ乾カシ、御送リ被レ下度候。画ヲカイタヤウニナリテ紙ニヒツツクナリ。此ノリハ高価ナモノニテ小生来其繁殖法ヲ研究シ居ルナリ。一昨年日光ノ大谷（タイヤ）川デ大谷ノリヲ少々トリ候。コレモ甚ダ少キモノナリ。肥後ノ網津川ノリトイフモノ『本草図譜』ニアリ。網津ハ何トヨムカ不レ知。又、肥後ノ上陣川ノ産、清水ノリ灰干茶ニ漬テ別ノ色ヨシト云トアリ。何レモ淡水ノ藻ト存候。水前寺（スイゼンジ）ノリハ小生蔵品アリ。貴下モシ肥後ノ人ニアハバ御聞合セ被レ下度候。先ハ右申上候。

敬具

宮六（一月三十一日付封書）

大正十三年一月卅一日

玉書難ㇾ有拝受。色々御示教に與り、御蔭を以て大いに参考、深く御礼申し上げます。蛇と玉とに就てのお話も大いに研究の題材と感謝致します。

御照会の梵鐘は、伊予温泉郡桑原村大字畑寺にある繁多寺に御座いまして、寺は四国八十八ヶ所五十番の霊蹟であります（此の寺の絵葉書贈呈したきと存じ、筐底捜索中の為、御返事遅延）。例の咄は大正五年春参詣の節、住僧より耳にしたるもので御座いまして、鋳造は元禄年間の由ですが、私は当日午後五時迄に松山市（徒歩にて一里半と記憶せり）に是非行く必要がありましたので、是以上調査の時間が在りませんでした。なんなら詳細を和尚に照会しても宜敷う御座います。

此の寺より松山迄道連れとなつた老人（松山の旧士族）の咄に、此の繁多寺の付近に清水寺といふあり。今は荒廃、繁多寺の当職が管理してゐて、名高き狐の証文（伊予の国守の奥方に化けて折檻され、将来四国に狐を棲はしめすと誓ひし）は、此の清水寺に在ると言伝へしも、証文は愚か此の伝説すら次第に人に忘れられつつ在ると、老人の憤慨せられた風貌、今尚目にみるが如く脳裏に存してゐます（尚繁多寺の由緒は『地名辞書』に出てゐます）。

淡水産海苔心がけて置きます。小倉の紫川に産する海苔は、昔より名物なりしが、製紙工場出来、全滅の感あるも、川上にはまだ在る筈です。拙宅より徒歩一里ばかりなるも、小倉に出づるには電車の便ちかければ、捜がして見ましょう（近々此の川の上流、徳力付近のツブ石（通鼻石の訛なるべし）を見物したいと思つてゐますから）。又、水前寺海苔にてつくれる高価な菓子を、一年前人より貰ひたる事あり。此の公園には二度参りましたが、水質実に見事です。本年七月、阿蘇宮田植祭に列する「宇太利」と称する女につき、取調べたき事ありますから、其頃同地方の藻類も、時間許さば気を付けて見ましょう。

南阿の保護植物 Silver Leaves、標本として昨年知人が送てくれました。お持合せの事と存じますが、もしお持ちなくば差上げますから御序のとき御知らせ希上ます。

咄かはり詩人Yeats のIrish Fairy and Folk Talesを読みましたところ、『宇治拾遺物語』の「鬼に瘤取らるゝ事」と同じ筋の咄があります。The Legend of Knockgraftorと言ひ、此の本では瘤が頬にあるにあらずしてhump of his backと「せむし」即ち駝谷の人となつてゐます。国文叢書『宇治拾遺物語解説』に「高橋文学士の朝鮮物語集、又笑林評にも類話あり。蓋し支那より出づる伝説なるべし」とあるも、此の童話も西洋、若くは印度方面より旅行して来たものでありますまいか。御示教願上げます。

今より三十年前の小学読本に、此の物語を平易な文章でしるし、木の空壷の側に、両頬の瘤を手で押へて、渋面つくる翁の挿画がついてゐましたが、尋常三年の子供のとき、此の咄位、興味を以て読んだ本はありません。

日中の稼ぎにて、身体綿の如く疲れましたから、本日は是にて失

礼致します。

省三　拝

南方先生　侍史

南六（二月三日付封書）

大正十三年二月三日午後二時半

宮武省三様

南方熊楠
再拝

拝復　一月卅一日出御状今昨朝拝受。拙妻老母死去ノ為メ一寸取込ミ居リ御返事延引仕候。畑寺之写真等態々御送リ被レ下難レ有、千万御礼申上候。小倉ノ川ニ産スルノリハ、御採集ノ節、其川水ガ全ク淡水ナリヤ、又時トメ鹹水ガ入リ雑ル事ナルヤ、トクト御聞正シ被レ下度候。小生ハ淡水藻ノミノ研究者ニテ、鹹水ノ雑ハル水ノ藻ニハ一向興味ヲ有セズ候。御採集ノ節ハ厚キ紙（画用紙ホドニテハガキ用紙如ク表面平滑ナル者）ニノセ、水ヲ加エテユリマハシ、ホドヨク画ノ如クナリタル上、風ニアテ乾カサハ大抵画ノ如クニ引ツキ申候。而メ別ニ其二三片ヲ、フオールマリン水ニ浸シ置キ被レ下度候。其外ニモ淡水ノリアラハ御採リ置キ被レ下度候。

南阿ノ銀葉ハ小生所持致シ居リ候。

鬼ノ瘤トリノ咄シハ諸邦ニ有レ之候。朝鮮ニアリト申ス事ハ古ク唐代ノ（西暦九世紀）『酉陽雑俎』ニクハシク出居リ申候。

友人末広一雄氏、故近藤廉平男ノ伝ヲ撰ム事ヲ郵船会社ゟ頼マレ色々ノ事ヲ小生ニ問合サレ申候。ソノ内ニ、鹿ノ悪日ト申ス事アリ、三月四日（上巳ノ次ノ日）ノ事ナリ。此日八十八ヶ所ノ寺又其余ノ寺ノ近傍ノ会所ニテ施行ス。貧富ニ応ジ物ヲモチ寄リ、又金銭ヲ醵シ物ヲ買ヒ集メテ遍路ノ輩ニ施コス。其外ニモ箇人ニテ理髪トカ洗湯トカヲ施ス。ソレ〳〵門口ニ札ヲカケテ広告ス。四国ゟ大坂其他ニ出ル商人モ送金メ之ヲ資ク。此鹿ノ悪日トイフ事分ラズトノ事也。

小生友人寺石正路氏ハ土佐ノ人ニテ甚ダ博識ナレハ、聞合セシモシカト分ラズ。小生ハ此日人多ク郊外ニ遊ブ故、鹿ガ食ヲ得ルニ苦シム故、鹿ノ為ニハ悪日（人ノ為ニハ施行ヲ受ク吉日）トイフ事カト存ジ居候。然ルニ其後『日本及日本人』エ誰カ出シタノヲ見ルト、四箇ノ悪日ニテ年ニ四ヶノ悪日アリ。又月ニ悪日四ツアリ。三月四日ガソレニ当ル故申ストノ事ナリシ。貴説如何ニヤ奉ニ伺上ニ候。

春画ナドニ小腹ヲホガミト訓セアリ。然し彼処ヲ模索スル状ヲ記セル文ニ「ホガミアタリサ子ガシラ」トシバ〳〵対句シアルヲ見ルニ、小腹ノ事ニ非ズメ陰阜（又陰山Mons Veneris）ノ事ト存候。古クゟイヒシ語ト見エテ、足利氏時代永正十一年成シトイフ『犬筑波集』（俳書ノ祖トイフ）冬之部ニ「スヾロヲフルヤホカミノサ夜神楽」ナル句出ヅ。紀州ナトニハ一向聞ヌ語ナルガ、四国又門司辺ニハ今モ申ス語ニ候ヤ。陰阜トハ小腹（大腸ノアル処）ノ下陰門ノ上ニ隆起セル所乃チ陰毛ノハエル所ノ少シ上ノ方ヲ申ス。スヾロハ亀頭ノ前尿孔ノ下ニスヾノ如ク分レタル所ナリ。

先ハ右申上候。

早々敬具

宮七（二月九日付封書）

大正十三年二月九日夜

拝啓　御身うち御不幸あらせられし由、御悼み申し上げます。老若を問はず、死程悲しいものは在りませんが、老寄の死は一段淋しく存じます。私も昨年七月老父をうしなひましたが、父は私の土俗研究趣味を甚しく喜ばれ、月々の家信は殆んど此の方面の資料のみにて、所謂舐犢の甘き恩に浴してゐましたが、遽かに幽冥処を異にし、非常に力を落してゐます。

扨て、御話の「ホガミ」を陰阜なりと言ふ事は如何でしょう歟。ホガミは御説の通り小腹にて、『和漢合類節用集』にも「小腹（ホガミ）（釈名）自レ臍以下謂二之小腹一」と出で、『訓蒙図彙大成』にも小腹（ホガミ）の臍下なる事を図示し、『古事記伝』にも「美蕃登（ミホト）は御蔭（ミホト）なりとて……小腹（ホガミ）は富登上（ホトガミ）の意」とありますから、之を陰阜とするはどうかと思ひます。関門地方、並に私の郷里高松にては、「ホガミ」といふ事は最早耳にしません。「ほどのよさ、ほどのよい女」などいふ言葉は、今尚遺ひますが、陰部を「ホド」と言ふ事すら最早obsolateです。

豊前にては、陰阜より下方の豊満なる肉付即ち俗に「ドテ」と称するところを「シシ」と申します。「シシ」は肉（シシ）でありましょう。そして「山は昔にかはらねど、ししだに落つれば、狐狸（キツネタヌキ）がなんで、あばれやう」と曰ふ野卑な唄があります。意義は、女が淫にすきむとも、最早年増となりて「ドテ」が低くなると、男の方から相手にしなくなるから跋扈せられなくなるとの事で、内証男をよく持つ年増女に対して用らる言葉です。

此の「ドテ」の事を、鹿児島にては「ヒナ」と申し、「ヒナの座禅豆、毛の膾（ナマス）」といふ俗謡があります。「オソソの御馳走」するといふ意味ですが、「ヒナ」とは『古史伝』に「陰門をヒナドと云は火の門か」などある如く、「ヒナド」の訛りと思ひます。

咄がそれからそれへと転りますが、陰門と植物に関係の俗謡を一つ御吹聴致します。

べべのしがらと通草子（アケビ）のからは、いとこ同志やよく似とる

是は金沢地方の鄭声です。べべは陰部で、意義は交驩後の玉門と通草子のからは酷似しているとの事に過ぎないのですけれど、通草子には開玉門（アケッド）の「ツ」を省きたるものなりとの説もあれば、甚だ面白く感じます。序でに金沢地方には、陰門を「べべ」と申しますから、関西地方にて「子供に赤いべべを着せる」など言ふ事は、同地方の人には当初甚だ耳触りになるそうです。

四箇悪日の事、私には全然初耳です。色々持合せの書をも調べて見ましたが、未だ判りません。暫く研究させて戴きます。『三世相』には、春夏秋冬の悪日を列記してゐますが、四箇悪日と曰ふのは見えません。吉凶に関する日取りにつき、他の諸書を見ましたが未だ発見しません。しかし、三月四日を悪日とするならば（此の謂れは不明なるも）、矢張四箇悪日では在りますまい歟。二日（ふつか）三日（みつか）などいふ「か」が箇の字なる事は書にも見えたれば、同地方の四箇悪日は、三月よつかの悪日の義にて、是を鹿悪日など言ふは、宮島の猿の口開の神事などいふ付会の説と同じく、とるに

足らざる伝説の如うに思はれます。

次に私から左の事に就て、お智恵をかりたう御座います。佐賀地方にて椎の花の格別見事に咲く年は「ソウモウ」と言ひ、此の年は凶作なりとて、「ケガチヂニ、ミロククヒ」と申します。此の文句が、私に十分徹底しないのです。最初ケガチは、加賀知の訛りと解し、ケガチヂは加賀知椎かと思ひましたが、未だ頼りないです。或は「ケガチヂ」は飢渇の訛かと思ひますが、佐賀では飢饉を「ケガチ」といふを耳にしません。尤も大分県地方では、飢饉を「ケガチ」と申す処もありますし、『斉東俗談』にも「前漢元帝紀註、師古曰、穀不レ熟為レ飢、菜不レ熟為レ饉」。『字書』「飢餓字異義同、田舎鄙民、年ノ飢饉スルヲガシント云フハ餓死ノ字ナリ、又ケカケノイオリト云フハ飢渇ノ字ナリ」とありますから、いづれがあてはまるべきかと迷ふてゐます。椎が荒歳に関係ある事は、諸書に見えてゐますが、其次の「ミロククヒ」とは、何の意味でしようか。

大正十年五月の『太陽』所載玉稿「鶏に関する民俗と伝説」に、結構な豊年を祝ひ、若くは難渋な荒歳を厭ふ為に、弥勒を口にするお咄が御座いましたが、慈氏の現在すと言はる兜卒天に往生して、親しく説法を聴問したいとの思想は、支那より日本へ亙り、深く信ぜられたそうですから、此のケガチヂニミロククヒも「飢渇ニ弥勒」の意義でしようか。それとも「加賀知椎に微禄喰」とでもあててよいでしようか。どうも此の俚諺の考証には閉口してゐます。貴説御伺申上げます。

紫川の藻に就て、鹹水の有無の事、素より注意して調べます。小倉地方には矢張海水が注入しますから、どうしても川上に行かなければなりますまいと思ふてゐます。球磨川の「ノリ」も「センダノリ」と称され、品質の良きので有名ですが、是も場所次第で、人吉辺てとれるものなら大丈夫と思ひます。

本日は是にて失礼致します。

省三　拝

南方先生　侍史

南七（二月十二日付封書）

大正十三年二月十二日午前十一時

宮武省三様

南方熊楠
再拝

二月九日出御状今朝九時半頃拝受。小生先日申上シ隋侯ノ珠ノ論文、今朝漸ク書キ上ゲ英国ヘ発送致候。或ル物或ル玉ヲ人ガ持チ居ルト其人ガ他人ニ多ク思ヒ付レ、其玉ガ他人ノ手ニ渡レハ又其新持主ニ愛ガ移ルトイフ事随分アリソウナ筋ト思ヒ居シガ、十八九日カ、リテ調ベタル処ロ、其例ハ一ツモ見当ラザリシ。因テ不レ得レ止ヤ、似タ事ヲ記シ置候。其レハR.Folkard, "Plant Lore" London,1884ニ、波蘭国（ポーランド）ニTroizideナル草アリ。此草ヲ持テハ過去ノ事一切忘レ恋愛ヲ生ズ。又ファン・ヘルモント（十七世紀白耳義（ベルギー）国ノ化学大家）説ニ、草アリ、之ヲ手ニモテバ他人ヲ〆其人ヲ愛〆去ザラシム。ヘルモント自身此草ヲ持シニ、或ル女ノツレ来リシ犬ガヘルモントヲ愛シ、其主人ヲ忘レテヘルモントニ随ヒ来ツタ。此草ハ何処ニモアリ

ト斗リデ名ヲ出シ居ラズ。

『山海経』（夏禹王ノ書トイフ）天帝ノ女姑摇山ニ死ノ薑草トナル。之ヲ佩ル人ハ他人ニ愛セラルト。『南方草木状』（支那植物書ノ最モ古キ者デ西晋ノ末筆）ニ、鶴草ハ南海（今ノ広東カラ交趾辺）ニ生ジ、其花鶴ニ似タリ。此草ニ虫生ジ、蝶ニ化スルヲ媚蝶トイフ。之ヲ女ガ持テハ、夫ニ常ニ愛セラルト。

一八四七年頃ノ『東印度群島及東亜細亜雑誌』（新嘉坡（シンガポール）発行）ニ、巫来（マレー）半島ノミンチラ人ハ、慾厳トイフ巌ニノミ生スルチンクイナル花ヲ難行ノ手ニ入レル。之ヲ手ニ入レルハ女ニ限ル。ソノ女ニ言寄リ、添臥ノ女ノ寝タ間ニヌスミ、代リニ銭ヲオキ帰ルナリ。此花ヲ竹筒ニ入レ、女佩レハ衆男競ヒ来リ、男佩レハ諸女ベタボレト来ル。頗ル手ニ入レ難キモノトアル。

スキート及ビブラグデンノPagan Races of the Malay Peninsular 1906, Vol.iiニハ、チンヅアイナル白キ花アリ、強キ香ヲ出ス。マラッカノ一所ノ岩ニ生ズ。サカイ蛮人、魔ノ助力ニヨリ之ヲトリ来リ、之ヲ佩レバ、其所ノ男女悉ク其人ニホレル故イカナル事ヲスルモカマヒナシト。サイゴン出板『仏領交趾支那雑誌』ニ、タマリンドノ木デ作レル箱ヲモテバ、美女ニホレラレ、上官ニ愛セラルト。

コレラハ、タヾ或ル物ヲ持タバ、男又ハ女ニ愛セラルトイフ迄ニテ、持チ手ガカハレバ愛モソノ持手ニ移リカハルトイフ明記ナシ。

貴下ナニカ持手カハレバ、愛モ其持チ手ニ移ルトイフ例、御承知ナラ御知セ被レ下度候。持チ手ガカハレハ福分モ其持チ手ニ移ルトイフ例ハ『琅邪代酔篇』其他ニアルモ、恋愛ガ移ルトイフ明記アル例ヲ見出ズ候。

或ル物ヲ持テハ人ニ嫌ハル、持チ手ガカハルト、其人亦嫌ハレ出ストイフ例ハ支那ニアリ。『宋書』ニ宋ノ明帝ハ、甚ダ言葉忌ミヲセシ人ナリ。其時山陽王休祐、動モスレバ言葉過チノ帝ノ不機嫌ヲ招ク。庾道愍ニアフテ自分ノ笏ヲ他人ノモノト詐ハリ見セテ相セシムルト「此笏ノ持チ主ハ貴人ナルベシ。然し此笏ヲ持ツ人ハ毎度人ニ嫌ハル」ト云タ。褚彦回ハ至テ謹慎ナ人ナル故、休祐試ミニ彦回ニ乞テ、其笏ヲトリカエルト、次日彦回明帝ノ前デ物申ストテ、自分ノ事ヲ下官ト称シタノデ、帝大ニ不機嫌ナリシ。ソノ片休祐至ツテ、実ハ私ノ笏ノ為ニ、私ガ毎度言葉過チスルト聞タカラ試ミニ謹厚ノ彦回ト笏ヲ取替タ所ロ、果ノイツニナキ言葉過チヲシタト云タノデ、明帝怒リヲ解タトアル。

ヤヤ之ニ似タ事ハ古スカンヂナヴヰアノ古伝ニアルTirsingトイフ名剣デ、最初露国ノ王ガ二小鬼遊フ所エ行会ハセ、此小鬼ハ刀鍛冶ノ名工ト聞居タノデ脅迫ノ一剣ヲ作ラシメタ。鬼止ヲ得ズ作リ上ゲ持来リテ、汝ハ罪モナキ我ヲオドシ付テ此剣ヲ作ラセタカラ、此剣ヲ人間ノ毒害物トノ作上タトイフ。ソレ𪜈此名剣ヲ抜クト、忽チ抜タモノガ立腹甚シクナリ、人ヲ殺サネバ刀ガ鞘ニ納マヌトイフ。ソレガ為メ此王モ死シ、王ノ後裔代々人ヲ殺シ、甚シキハ子ヤ兄ヲ殺シ、自分モ殺サルヽトイフ事アリ。コレハ右ノ笏トハ一寸筋ガ違フガ、持チ手カハルモ刀ノ性質ガ其人ニカワリツキマトフ所ガ似居ル。

此刀ニ似タ事小生幼少ノ片、新平民共ガチョンガレナドニ謡ヒ来リシ白井権八ノ話シニ、青江下坂（アオエシモサカ）ノ刀ヲ持ツモノハ人ヲ殺サネバ気ガスマヌ。其刀ヲ人ノ手ニ渡セバ、其人亦ソンナ気ニナリ、凶ヲ招

クトキ、シ事アリ。何ノ書ニ出タ事カ知ズ。貴下此青江下坂ノ刀トイフ事ヲ聞キシ事アリヤ。

徳川ノ家ニ、村正ノ刀ヲ嫌ヒシ事水戸義公ノ話シヲ集メタモノニモアリ。真田左衛門佐ハ徳川ノ家ヲ根絶セント志シ、居常村正ノ刀ヲ佩シトアリ。内藤恥叟翁説ニ、徳川清康・広忠ト二代ツヾキテ村正ノ刀デ殺傷サレタトイフ。福島勝太郎氏(自由党ノ員デ静岡生レ。大豪家タリシガ、新橋芸妓ヲ根引シナドノ蕩産シ了レリ。三十七八年前小生米国ニ在シ時ノ友人也)説ニハ、家康或ル日刀ヲ多く集メ見シニ、村正ノ刀ヲ紙デ拭フト忽チ血ガ付キシトイフ。因テ遺伝トモ申スヘキカ、他日自分亦村正ノ刀デ斬ラル、モノト心得、甚ダシク此刀ヲ用心セリトイフ。『藩翰譜』ニ竹中采女正重義長崎奉行中、平野屋トカイフ大商ノ美妾ルリトイフヲ強奪強姦シタ上、其夫ヲ籠舎シナト悪行多クテ訴ヘラレ切腹ニ処セラレシ罪状ノ中ニ、此人、徳川氏亡ビタラ又高価ニナルヘシトテ、村正ノ刀ヲ多ク買ヒ込ミ置シト云事アリ。

兎ニ角、玉ナリ何ナリ、持チ手ガカハルニ随ヒ、衆ノ愛モ其持手ニウツリ行クトイフ例御存知ナラ御知セ被レ下度候。江戸時代ノ小説ナドニアリソウナ事ト思ヒ捜シタレド、今日迄見当ラズ。

小腹ヲホガミト訓スル事ハ小生モマタ知ル。乃チ前状ニモ此事ハ申上タリ。『和名抄』ニモ「小腹和名保加美」トアリ。小生ハ小腹ヲホガミト訓スル事ヲ疑フモノニ非ズ。タヾ徳川氏ノ中世以後成リシ春画ノ詞書ニヤ、モスレバ「ホガミアタリサネガシラ」ト続ケ書タル例多キヲ以テ、春画等ニイヘル(乃チ徳川氏ノ中世以後ノ)江戸詞ノホガミハ陰阜ヲ指ス事ト思ヘリ。然ラザレハサネガシラト続カズ。男ガ女ノ一件ヲ捜索スルニ陰阜ト吉舌頭トツヾクハ常例ナルガ、按摩デモナケレバ臍ノ直下ノ小腹ヲ先ヅ探ルハ迂遠ニノ実際ニ遠シ、ホガミ、サネガシラ、ソラワレトツヾクガ例也。ソラワレハVestibule乃チ陰膣ト尿孔ノ前ナル洞穴ノ上部ヲイフナリ。既ニ春画ノホガミハ陰阜ヲ指ス事ト仮定ノ、貴地方等ニ陰阜ヲホガミトイフ習ヒナキヤヲ問上タル也。既ニナキ由貴書ニ見エ、当国ニモナケレハ此上ハ江戸生レノ故老ニ聞ク外無シ。

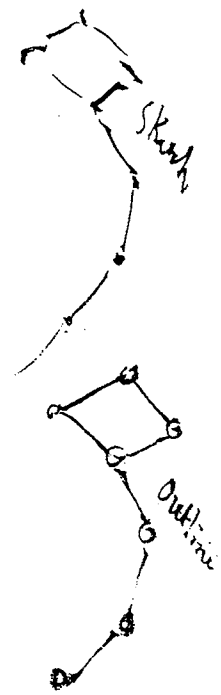
『和名抄』『新撰字鏡』等ノ古書ヲ引テ、古訓ヲ説クニ中ラサル事多シ。コレハ其頃、漢字、漢名ニ和名ヲ当テタル人ガ実際支那ノ事ニモ、日本ノ事ニモ十分通ジ居ラザリシ故也。射干(コレハ梵名スリガラ、アラビア語シヤガール等ノ音訳デ、英語デジヤツカルト申シ耳ヲ垂レタ犬ハ此物ト出シトイフ(耳ノ立タ犬ハ狼ノ後胤ト)。犬ヤ狼ト同属ノ啖肉野獣也。印度デハ之ヲ狡智極マルモノトノ当国ノ狐ノ如ク種々雑多ノ物語ヲ生セリ)ヲキツネ、楓ヲカエデ(楓ハ徳川氏世ニ日本エ支那ト実物来リ、当地拙妻ノ妹聟ノ宅ニモアリ。カエデト全ク別物ナレ乍、古人ハ日本ノカエデ乃チモミヂヲ詩ニヨムニ何ト書ウカト支那ノ書ナド見マハシ、楓(フウ)トイフモノハ葉ニ岐多ク、秋末紅葉ストアルカラ、扨ハ楓ハモミヂノ事ト即座ニキメテ用ヒシナリ)、ナト、押し推量デ前後深イ考エモナク、アテタル也。大抵和漢共有ノモノハ、当ツタ事多キモ、日本ニ有テ支那ニナク、支那ニ在テ日本ニナイモノハ当ラヌ事多シ。小腹ハ人毎ニアルモノナガラ其頃小腹ニ当ル和語ナク、概ノハラト云タ所ヘ別ニホヾノ上ノホガミトイフ詞アル故、臍下ヲ小腹トイフトイフ(ママ)支那書ニ合セテ小腹ヲホガミト訓シ、後ニハ読書人ハミナ小腹ノ事ヲホガミト心得ル

事ト成タ事ト思フ。

黄　芩　和名コガネグサ　　巴戟天　和名ヤマヒヽラギ
紫　参　和名チヽノハグサ　　秦　艽　和名ツカリグサ
白　鮮　和名ヒツジグサ　　又ハカリグサ

是等ハ日本ニナキモノニテ、徳川氏ノ世ゟ輸入シ、日本人始テ其実物ヲ見ルニ及ブ。然し紫参ヤ秦艽ハ支那デモ其何者タルヤヲ忘レ了リタレバ、日本ニ知レル筈ナシ。然ルニ右様ノ和名デ古書ニ載セアル故、昔シハ是等ノ物日本ニモアリシガ今ハ絶滅セリト心得タル人多シ。然ラズ、実ハ昔シカラ絶対ニ日本ニ無リシナリ。無リシナガラ右ノ楓ノ例ノ如ク、其頃日本ニアリフレタモノヽ当時ノ名ヲソレ〳〵ノ漢名ニ押シアテタルナリ。扨ソノ和名モ忘ラレタル故、『和名抄』等ノ出来シ頃コガネグサ、ヤマヒヽラギ等ト呼レタルハ、今何トイフ草木カサツパリ分ラナクナリシナリ。故ニ徳川ノ世ニ初テ渡来シ、今ニ栽培シツヽケ居ル黄芩（ワウゴン）ヤ巴戟天ヲ、ワウゴン、ハゲキテント呼ブハ正シ。昔シ他ノ物ヲオシ当タルマヽニ、コガネグサ、ヒツジグサト呼バヽ正ヲ失ヒ居ル。丁度タヌキニ、Raccoon-Dog又Coon-Dog又タヌキゟ転訛シ出タル Tanate（タナテ）ナル英語アルニカマハズ、ヘボーンナドガ倉卒推量デオシ当テタ Badger ナル語ヲ用ヒ、Heron（ロン）は蒼鷺（アオサギ）（乃チ河内ノ姥ガ火等ノ光ルハ此鳥也トイフ。西洋ニモ此鳥夜光ル由ヲイフ）ナルヲ、ヘボン等何タル動物学ノ心得ナカリシ人ノ推測オシアテノマヽサギ（乃チ白鷺）ニ通用スル如キ、誤謬タルヲ免レズ（白鷺ハ Egret（イグレット）ト申ス正シキ英語アリ）。

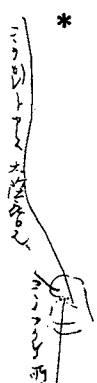
此等ノ誤名デ翻訳スル事多キゟ、日本ノ折角ノ名文妙句モ欧米人ニ取テ何ノ感興ヲ起サシメヌ事多シ。「Heron ノ白キニ烏（カラス）ガ恋スル」由ヲ云テモ一向分ラズ。Heron モト白キモノニ非ズ。蒼灰色ノキタナキ鳥ナレバナリ。名詞ニ限ラズ、動詞・形容詞ニ至テモカヽル誤訳多シ。英語ニ所謂 Solecism（ソレシズム）、昔シ漢学者ガ倭習ト云シヤツニ候。昨今流行ノ七面倒ナ事起ルトデリケイトナ問題〳〵トムヤミニイフ。デリケイトハ十分審カニ慎重ノ処分ヲ要スルノ義ナレバ、今日イフ義ニ叶ハヌ事多シ。今日ムヤミニデリケイト〳〵トイフハ、コミ入タムツカシイ事ヲサス様ナレハ、実ハデリケイトニ非ズノ intricate トイフベキナリ。字書ノ Synonyms ノ条ナド鵜呑ミニノモノヲイフト此類ノ間違ヒ多シ。小生明治二十五年ロンドンニ行キ、大貧乏ニテ馬小屋ノ二階ニ居リ、二三年過ス内、雑誌『ネーチユール』ニ天文学上ノ問題出デシヲ見当リ、試ミニ之ヲ解シ、一文ヲ草シオクリシニ掲載サレ、急ニ名ヲ挙タリ。其時ノ拙文ヲ活板ニスリ、校正ノ為メオクリ来リシ日、丁度故サー・ヲラストン・フランクス（大富人ニテセミチツク諸語ノ大学者、其前年迄大英博物館長タリシ。『大英百科全書』ニ其伝アリ）ニ識ラレ、饗応サレシ席ニテ、右ノ稿ノ亀ズリヲ出シ見テモラヒシニ、「サレバナリ。外国人ハ文章ガイカニウマクテモコンナ事ガアル故、英国ノ小児ホドニモ行カヌ」ト苦笑ノ示サレタルヲ見ルニ、星辰ノ集リグアイノ事ヲ論ジタ所ニ、definite Sketch ト書キアリシ。フランクス氏曰ク、Sketch ト Outline ヲ大抵ノ辞書ニハ異名同実トノ（Synonyms）挙ゲアル。ソレヲ見テ、コンナ成語ヲ作リ出シタナランガ、辞書ノ頼ム可ラザルハコヽニアリデ、此二語ハ全ク別意ノモノタリ。Sketch ハ definite ナラズ、definite タルモノハ必ズ Outline ト称スベシトノ事ナリシ。



吾国ノ古学者ガ古名ヲ説クニ、多クハ其物ノ実際ニ達セズ、タヾ書物ト字面ノミニ力ヲ入ル、故、真実ヲ去ル事多シ。例セバ『松屋筆記』巻七五ニ催馬楽歌ノ「陰(クボ)ノ名ヲバ何トカイフ、ツラタリ、ケフクナウタモロヒノナカノヒヅキメケフクナウタモロ」トアルヲ解クトテ、『日本霊異記』下ノ巻、悶シナダリクボ云々、『和名抄』紫貝、和名ウマノクボガヒ(馬ノ陰(クボ)門貝、コレハ常ノ貝子(オマンコガイ)ヨリ大ナル故、馬ノ陰ヲ象リシ名ト見ユ、熊楠注)『塵添壒嚢抄』二ノ巻陰事条ニクボトイフハ女陰ノ異名ナルベシ。(以下ハ松屋与清ノ説也)ツラタリハ陰門ノ下ノ処也。小水(熊楠、小便也)、淫汁ノツレ垂ル、所ナレハサイフ也。(熊楠曰ク、仏語デ Fourchette 此処ロ春画ナトニ陰門ノ後ロ、肛門ノ前ニカキ居ル。強姦等ヲ検スルニ甚ダ緊要ナル処也。強姦ニ限ラズ、女ガ男ニアフタ事アルヤ無キヤヲ検スルニ甚ダ緊要ノ処也)、ケフクハ陰額ニテ毛ノ生エテフクラカナル由ノ名ナルベシ、ナウタモロハ未詳、コレハタ陰中ノ小名ト見エ、ヒノナカノヒヅキメハ今イフ女陰ノサネヲ『和名抄』ニ吉舌ヒナサキナドアレバ、吉舌ノ一名ヲサモ言ヒケンカシ云々」トアリ、催馬楽ニカヽル女陰ノ名所ヲ列ネ謡ヒタルナド異様ナ様ナレド、何レノ国ニモ昔シハ農作ヲ神ニ祈ル事盛ンニ、ソノ為ニ陰陽ノ和合ヲ祝ヒ神前デ謡ヒシ事故、カカル事ハ何レノ国ニモ多キ事、リーランドノ著書ニ詳論セリ。ケフクハ右ノ解ノ通リ陰毛ノハエギハ(Pubes)ニ当ル。陰阜ト同事ナガラ陰阜ハ小腹ノ下ノモリ上リタル肉隆起、ケフクハ其肉隆起ニ毛ノハエ初ル上界ヲイフ故、詳シクイハヾ別ナリ。此松屋大人ノ考証ナドハ中々ヨク出来居ル。

小生前年『考古学雑誌』へ書シ事アリ。*コンナ風ノ帽子ノ名所ハ全ク女陰ノ所々ヲトリテ名ケシモノニ候。

*



カヤウノ名ヲ山岡明阿ノ『逸著聞集』ニ出シアリ。ソレハ戯作乍ラ陰門博士トイフ人アリテカヽル名ヲヨク知リ居リシトノ事ナリ。

然ルニ同書九五巻に又此催馬楽歌ヲ論ズル迚、ヒノナカノヒツキメハ吉舌ニテ、玉門ノサネトモ又ハ子壷トモ云モノ、異名也トアリ。サネ Clitoris と子壷 Uterus ヲ混同セルナドハ随分実地実地ニ暗キ仕方也。コンナ事故『和名抄』ニ小腹ヲホガミト訓セタレハトテ、又ソレヲ拠ロトノ小腹ヲホガミト訓ミタル書多ケレハトテ、丁度黄芩ヲコガネバナ、秦艽(コレハ今日何物ヤラ支那ニ行クモ分ラズ)ヲハカリグサ、白鮮(徳川氏ノ世ニ渡来シ今モ植ル)ヲヒツジクサト訓デ正訓ヲ得タリト思ヒ居ルト同ジク、或ハ実際ニ遠キ訓カトモ思フ。前状ニ引タル「鈴口ヲフルヤホカミノサ夜神楽(ヨカグラ)」ノ句、足利氏ノ中葉、永正十一年編トイフ山崎宗鑑ノ『犬筑波集』(俳書ノ鼻祖

トイフ）ニ見エタリ。戦乱不文古書ナド不穿鑿ノ世ニ当世ノ俗語ソノマヽ、読ンダモノ故、大ニ参考ノ便トナリ申候。コレハ春画ニヨク見ル女ヲジラス(mortify)為メニ膣ニツキ入レズ、予メ鈴口ヲ以テ陰阜 Mons Veneris ノ毛際（Pubes）ニナスリツケ、スリツケ〳〵スル体ヲ「鈴口ヲフルヤホガミノ」ト読ンダノデ、ホガミハ頬上（ホカミ）デ、図ノ如ク巫女ガ鈴ノ口ヲ頬ノ上迄フリ上ゲシトイフテ、実ハ陰茎ノ亀頭ノ鈴口ヲ陰阜ノ毛際ニスリ付ケスリマハス体ヲノベシト存候。神楽ハ「御祭リヲ渡ス」ナドイフ如く、一儀ヲ行フヲ神楽ヲ奏スルニ比セシナリト存候。然ラザレバ此句聞エズ、鈴口ヲ小腹ニスリ付ルデハ聞エズ候。又鈴口ヲ小腹ニスリ付ル等ノ事ハ決ノナシ。実際ニ通ゼズ。

寛永廿年成シ貞徳ノ『新増犬筑波』ニ「折レズ曲ラズ通ラザリケリ」「タメシ物矢ジリモ矢ジリサネモサネ」（宗鑑）「ナスノ、狐女ナラズヤ」（貞徳）、宗鑑ハタヾ甲（マヒト）ノサネヲ読ダノダガ、貞徳ハソレヲ女ノ吉舌（サネ）ノ義ニ取リナシテ此三句ヲ付ケタル也。コレデ兎ニ角寛永頃既ニ吉舌ヲサネトイフタ事ガ分ル。又連歌ノ方トノ、一二句ト三句ト同時代ノ語ヲ用ル習ヒナレバ、宗鑑ノ時代ニモ多分吉舌ヲサネト云フタト分ル。古書古名ノ穿鑿到ツタ後世ハ、サシ当リ通俗ノ当世語ヲ用ヒタ俳書ナドノ方ガ大ニ当時ノ実際ヲ見ルニ有効ト存候。

貴書ニホドノヨキ、ホドノヨイ女、コレハ程ノ字ニ当リ仮名デ書バ陰ト同ジクホドナレ𛀁音ガチガヒ申候。ホド（程）ノ𛀁ハホモドモ Pōland（英語ノ）ノ Pō ノ𛀁ノ音也。ホド（陰）ノ𛀁ハホガ英語ノ colateral ト発音スル𛀁ノ co ノ音、ドハ Do you like it? ト問フ𛀁ノ Do ノ音ニ候。日本語ハ（東京人ナドハ無茶苦茶ナレド）先ハ京坂ヲ標準トスベキモノデ此音ノ区別ヲ知ル事必要ニ候。然ラザレバ鶴・蔓・釣、箸・橋・端ガ何レモツル、ハシデ同一ノモノニ混ジ視ナサルベク候。日本語如キ簡単極マル語ハ此音ノ区別アル故、ソレ〳〵聞別ケ得ルニ候（東京人ナドハムチヤナリ。其東京語ヲ自今標準トスル故、オヒ〳〵ハ語原全ク分ラヌ事トナルベシ。乃チ火ト樋ト日ヲ全クヒナル一語トシ、一源ニ出シモノトスルベシ。西洋人ガ日本語ヲ論ズルニ文字ノマヽデ発音ノ差別ヲ知ラズニ色々珍説出ルモコノ混雑ニヨル）。

貴書ニヨリ大陰唇ヲドテ又ヒナト称スル事ヲ得タルヲ感謝ス。コレニテヒナサキ（吉舌）ハ大陰唇ノ頂尖トイフ義ト分リ、大ニ益ヲ得申候。此ヒノ音ハ樋（ヒ）ノ音ナルベク火トハ関係ナキ事ト存候。乃チ開（ヒラク）ノ意味ヲモツ語ト存候。

通草ノ俗謡又甚ダ面白ク、奉二多謝一候。女陰ヲベヾトイフ事ハ当国那智山辺デモ今ニ申候。カモジクサトテ莠（エノコログサ）ニ似テ粗毛大穂ナルモノヲベヾノケト称ヘ候。他所ニテハボヾト申候。『松屋筆記』ニ『新撰字鏡』、蒲、音開山女也。阿介比云々、開ハ女陰ヲイヒ、其ニ草冠ヲ加ヘテアケビト訓タル倭字也。アケビハ開玉門（アケツ）ノツヲ省キタル語ニヤ云々。北慎言説ニ出羽国山女村アリ、其辺ニテアケビヲヤマヲンナト云リトゾ云々。『古今要覧稿』ニ宗行ノ歌集ヲ引テ琳賢ガ許ヨリイガ栗アケビ抔遣ハシテ「イガクリハ心弱クゾ落ニケル此山ヒメノエメル笑見テ」是ニテ山姫トハアケビノ事ト知レタリ。返シ「イ

ガクリハ君ガ心ニナラヒテヤ此山姫ノエメバ落ラム」。『山家集』西行ガ寂然ニ遣ハシタル歌十首在テ、返シ「マスラヲガ妻木ニアケビサシ添テ、暮レバ帰ル大原ノ里」。『本草和名抄』アケビハ朱実ノ義也ト『国史草木昆虫攷』ニ云ト、此実赤ク色付クモノニ非ズ。アケビハアケツビノ省略也。歌ニ山ヒメトヨムモ同意ナルベシト有テ、越前ニ通草ヲヤマヲンナト呼フ所アルヲイヘリ。当国ニハアケビヲアキミト訛ル所アリ。秋実熟スル故ト心得居ル。又熟スレバ開ク故、開実ナリト思ヒ居ル人モアリ。語ノ原由ヲ知ルハ一寸六カシキ事ニ御座候。

四箇悪日ノ事ハ、小生清明ノ『簠簋内伝』ナドシラベシモ一向見エズ。『日本及日本人』ニハ（去年紀元節発行）「徳島デハ旧三月三日ノ翌日ヲシカノアクニチト云フ。柳里恭ノ『独リ寝』ニ「日取リハシカノ悪日ニモセヨ、ドコヤラニ居玉フ様ナル年恰当ナル」ト有リトテ尋ネル人アリ。『万年大雑書』（元禄十一年板）ヲ見ルニ、四ケノ悪日トテ大ニ悪キ日ノ事ト標ノ、六月十四日・十六日・十月十四日・十六日、此日ニ中ル片何事モ始メズ、ワロシト云フニテ、『独リ寝』ノ文ヲ解ベキカ。又『女用智恵鑑』（明和六年板）ニハ毎月悪日トノ四日・十一日・十八日・廿五日、此日暮六ち夜九迄アク日也。八日・十五日・廿二日・廿九日、朝六ツち昼九ツ迄悪日ナリ。毎月此日成就セヌ也トアリ、四ケノ悪日ハ一年ニ云ルト一月ニ云ルト両様アルガ如シ。現ニ徳島地方ニテイフハ毎月ノ悪日ナルベシ。『女用智恵鑑』ニハ八箇ヲ挙タレド昼夜各別ナレバ、八日ニテ全ク四日ノ勘定也。孰レ陰陽家ノ定メナルベシ」トアリ。

椎ノ花ノ事ハ小生聞キ始メナリ。ケガチジニミロク、ヒノ義ハ一向分ラズ候。飢渇死ニ美禄食ヒトモコヂ付クベキカ、一向小生ニハ分ラズ候。

前書御申越ノ愛尓蘭（アイルランド）ノ鬼ノ瘤取リノ話シハ、一八七〇年初版 Thomas Keightley ノ The Fairy Mythology ニ出居リ候。小キセムシガ堀ノ側ニ夜休ムト、月曜、火曜トクリカエシ謡フ声スル。「ソレカラ水曜」トセムシガ謡ヒ加エルト精魅共大ニ悦ビ、堀ノ中ヘツレ込ミ饗応シ、背ノ瘤ヲトリ去ル。此事ヲ聞ク今一人ノセムシガ行キ、聞居ルト精魅ガ又「月曜火曜ソレカラ水曜」ト謡フ。何ノ文句切リノヨシアシモ考ヘズニ「ソレカラ又金曜」ト添エ謡フト、ソレデハ折角ノ謡ガ茶々無茶ニナルト怒テ堀ヘツレコミ、前夜トリ置キノ瘤ヲ加エラレタトアル。注ニ曰ク、コヽハ木曜ト加エネバナラヌ処ダト。又云ク、パーネルハ此ノ伝説ニ基ツキ面白キ魅談ヲ作レリト、小生ハ見シコトナシ。

同書ニ又ブリタニーノ伝説ヲ載ス。ソレハ Goel ノ谷ニ毎夜精魅共踊ル。人之ニアヘバツレコマレ命ヲ失フ事アリ。鋤ノ柄ヲ持シモノヲ犯サヌト知レ、鋤ノ柄持テ精魅ノ踊リヲ見ニ出掛ルモノ多シ。Peric ト Jean（両人共裁縫師）モ見ニユキ、其踊リニ加ハラントテ闘ヲヒクニ Peric ニ当ル。此者セムシナリ。髪赤ク、セイ低キ小男也。進ンデ踊リニ加ハルト魅輩「月曜火曜水曜」ト謡フ斗リデ一向面白カラズ。Peric 水曜ノ次ニ一寸謡ガトマルニ乗ジ「ソレカラ木曜ソレカラ金曜」ト謡ヒ加エル。魅共大ニ悦ビ、トリ巻キテ「美貌・位階・金銭三ツノ内何ヲヤラウカ」ト問フト、「髪ノ赤キト背中ノ瘤ガ苦ニナルカラ助ケクレ」ト云フ。魅輩ソレハ易キ事ト、此男ヲ手毬ニノ、アチコチ擲ゲ受ル事数回ニノ髪黒クナリ瘤ナクナル。Jean

之ヲ見スマシ、数夜ノ後チ行テ踊リニ加ハル。魅共「月曜火曜水曜ソレカラ木曜ソレカラ金曜」ト謡フト、Jeanガ「ソレカラ土曜ソレカラ日曜」ト謡フ。「ソレカラ何ダ」ト魅共問フト、「ソレカラ土曜ソレカラ日曜」ト謡ヒ続ケル。「何ヲ望ムカ」ト問レ、「金ヲクレ」トイフ。魅共前ノ如ク空中デナゲ受ル事数回ノ後チ、苦シクテタマラズ「縦セ」ト叫ブ。ソレ与地ニ達ノ見ルト、Pericノ赤髪ト瘤ヲ自分ニ付ケラレ居タト。Villemarguì 説ニ、此魅共神罰ニヨリ永劫ニカクノ如ク謡フテ毎夜躍リ苦シム。人ガ躍リニ加ハリ一週間ノ日ノ名ヲミナ謡ヒ、扨「コレデ一週間ガ仕舞フタ」ト謡ヒ納メルト躍リ止ムヲ得テ解脱スル筈ノ処ロ、Jeanハ一週間ノ名ヲミナ謡ヒナガラ、「コレデ一週間ガ仕舞タ」ト謡ハナンダカラ、魅共解脱シ得ザルヲ憤テ、瘤ト朱髪ヲ付ケタトアル。

又西班牙（スペイン）ノ伝説デハ、Pepito el Coroovado ナル男、ギターヲ弾ジ、歌フテ宴席ノ興ヲ助ケ業トス（Gobeph Ha セガレ）。此者一夜モレナ山ヲ通ルニ、道ヲ失ヒ野宿ス。睡リニ入ラザルニ精魅共「月曜火曜水曜」ト謡フ。此男ソレデハ不足ト有テ、「木曜金曜土曜」ト添エ謡フト、精魅等大ニ悦ビ、大声デ数時間「月曜火曜水曜デ三、木曜金曜土曜デ六」ト謡ヒサハグ。ソレ与此男ヲ取巻キ何ヲ礼ニヤラフト問フ。瘤ヲトリクレト云フト忽チ瘤除カル。ソレ与此ノ噂弘マリ、Cirillo（シリヨ）ナルセムシ行キ、謡フニ、「ソレカラ日曜デ七」トヤラカスト、大ニ怒テドヤシツケ、又ヒネリツメラレタル上、瘤ヲ付ケラルトアル。是レ与無用ノ言ヲ吐テ災ヲ招クヲ「ソレカラ日曜デ七」トイフトアル。

先ハ右申上候。

早々以上

宮八（二月十八日付封書）

大正十三年二月十八日夜

玉書難レ有拝誦致しました。有益なる資料ならざるはなく厚く御礼申上げます。扨て例のト一ハ一の事に就き、友人有馬敬助の談に由ると、矢張是は女同志の性慾遊戯で、ト一は男の役をつとめ、ハ一は女の役をつとめ、ハ一は絶対にト一の命に服する事となつてゐるので、俗に「ハ一出世してト一となる」など曰ふそうです。有馬も併かし、其の方法が十分呑めこめないので色々其の道の者に訊したが、宛も秘密結社の如く、決して其の内容は語らなかつたそうです。或は此の遊戯には専用の塗り薬在りとも言ひ、此の起源は吉原の遊女病気療養中、不断添寝せし身の俄かに寂しさを感じ、発明したるなりとの説も在るそうですから、古るくよりあるものではなからうかと思ひます。

有馬は曽く仏領西貢（サイゴン）に居ましたので、例の69を見たそうですが、是も女同志が互に淫水の出てくる迄舐合するので在つたそうです。五円出して見物した助平の有馬の話に由ると、是はト一ハ一とは稍異ひ、仏人が此の様に極度に達した女を拉して、自己淫欲の便にするものらしいとの事です。

「ホドノヨイ」が「程の好い」である事は、私も能く承知致し居り、今より三十年前流行の、

オツにからんだ垣根の糸瓜、ぶらりとさがりて、ホドノヨーサ

カネカ（此の唄高松では、大阪下りの旅役者の口よりひろめら

れて後、色々つくり替の唄が出来ました。）

は素より、関西地方にて今尚「ホドノヨイ人」といふが男女共に遣はるも、決して「陰のよい人」の意義ではない事は知つてゐますが、しかし「程の好い」が「陰のよい」に通ずるよりして、偶々「ホドがよいぞ」と言ふ事が「程の好い」といふ義につかはれない事在るを申したのです。先年、自分等野郎連の集合する前を、年頃の娘通りかかりしを、一人の男見て「あのこは、ホドがよからうぞ」と一種異様の目玉して品騰し、一同哄笑した事が在ります。是などは、あたりまへの「程が好い」に解釈しては興味がないので、要するに現今の「程の好い」が「陰の好い」に通ずるよりして、偶々こういふ Laughing Stock となる言葉を耳にする事あるを御吹聴したに過ぎないのです。角力甚句の「お嬶マメナカ、達者なか。達者で在らうと在りまいと、三年前にひま貰ふて、今では可愛人が在る。オマイさんのお世話にやノホホーヲノホ、エーエのりはせぬ」の「マメナカ」が、魔滅なか、丈夫なかの意義では在るが、陰所に通ずると同じ様なものです。

咄ちがひ、大阪にては漬物上手の女の〇〇は味よしとの言伝ありますので、時々ふるまいに與つた遠慮のない客が、其の漬物を口にして、「味がようおまつせー」と曰て、主客哄笑する事あります。是も当事者だけで、其の真意が読めます。『伊勢物語』の「まめ男にてものがたらひし」のまめは、真実忠誠、恋のうへに真実の男の意味でしょうが、現在豊前では、まめ男と言へば嫌な意に通じます。そこで私の郷里高松で、男の児と女の児とが遊ぶを、はたの子供がひやかすに、「アラ、男と女のチン〳〵ゴ」と言ひ、大阪で「男と女と遊ばんもん、一けんまなかに傷が付く」「誰れやらさんと誰やらさんとキツキツキイ」と言ふを、豊前では「男と女とマメオトコ」と簡単にからかひます。

陰阜をドテと曰ふ事は世間にてよく耳にし、「わたしのオソ、舞子の浜よ。ドテは松原、なかあかし、一の谷からししが出る」などいふ俗謡があります。お説の「ほがみ」の事、成程と私にも疑問の念が起りました。しかし、鈴口を臍下にあてる事はなきにしもあらず、『二人かむろ』にも「上から大腰に子宮を見かけて突き込んだり、またはちょこ〳〵口元を茎節の出張りでこすつたり、抜いて臍までぬめらせ、外して尻へ素股をくぐらせ……」などありますから、所謂額の上方をホガミと曰ふも方便でなきやう思はるも、是は矢張一段研究してみなければならないと存じました。当地方にては、昼間性交するを「昼山登る」と曰ひ、遊廓を得意とする按摩は、宵の口は町家で稼ぎ、山入をすました頃を見計つて色町に稼ぎに行くなど申します。そこで前報の「山は昔にかはらねどししだに落つれば……」云々の俗謡が一段興味が出てくるのです。催馬楽の「つらたり」が淫水小水の垂る所なりとの解は面白き説と存じました。守部は是を「つびたり」と解し、「けふくなうたもろ」を、毛ふく嚢即男陰を賜はれなりとし、一篇の意は、開の名を何といふ、其本名は屎たり、然らば毛陰裳賜はれかし、屎の中の子壷を箝めて子を生さんと云ふ陰陽和合の歌なりと解してゐますが、貴見如何でしょうか。尚又、朱門より肛門に至る通路を、俗に「蟻のとわたり」と申しますが（大阪・京・但馬地方・九州）貴地方にては如何でしょうか。鈴口で思出すことは、巫女の用ふる鈴は、もと広心樹（ヲガタマ）

の実（此の実赤く、一所に多く集り鈴の形の如し）にかたどつたるものなりとの言伝がある事です。広心樹は日向に多く、昔は古今伝授三木の伝の其一なりと言はれた此の木の実が、鈴の元祖なりと言ふ事は、却々面白く存じますが、如何なる書に此の事あるや、私はまだよく発見せずにゐます。

さて又、豊前にては「ちぢみ（縮毛）ものよし」とて、ちぢみ女の逸物は殊よしと申します。又諸国にても言ふ如く、「カヤクが多い」など申します。カヤク多いとは臓物が多く「数の子天井」の義でしよう。大阪にて夫婦のうち、家内の年増なるを「オイニョウ」又は「団尻」と言ふのは如何な意義でしょうか。所々により、国により様々名称多く、大阪にて「親に逢はいでも、子に逢はいでも、逢て死にたいすぼきまら」の俗謡たる「スボキ」まらの「スボキ」は、九州の人には解されん言葉です。九州人は我々の言ふ「スボキ」を「ツト」と申します。「善行寺まら」と曰ふが如きも「行きも戻りも難有い」からじやとの謂れをききて、始めて形容の旨きに感服した如うな事もあります。

あまり長くなるから、俗謡を二三掲げて筆を擱きます。

○まらのいきり立ち、鋸の歯もたたぬ。オメコエライ奴じゃ、それなやす（豊前）

○こたつで酒飲みや、浜辺の遊び、足で貝ほる事もある（どゞ逸）

○傘の骨ほど男はあれど、ひろげてさせとは主ひとり（どゞ逸）

○チョンコ〳〵でチョンコの子が出来て、チョンコ〳〵で又チョンコ、チョンココラ〳〵

（三十年前、高松にてチョンコ節流行す。越後新潟地方にては玉門を「チャンベイ」と言ひ、性交を「オチヤウマンする」と曰ひ、但馬地方にては「チョンボリ」又は「チョボ」と陰門を呼ぶ。）

省三　頓首

南方先生　侍史

二〇

北京雍和宮の生殖神の絵葉書一葉進呈します。昨年友人が同地へ商用で行つた時、土産に貰つたものです。

南八（二月二十一日付封書）

大正十三年二月廿一日午後三時半

宮武省三様

南方熊楠
再拝

十八日付貴書只今拝見、ト一ハ一ハドウモ分ラズ。舐メル事ナルベシトハ誰モイフ事ナレ𪜈ソレガタシカ、分ラズ。実際舌ハ陰膣ニハ入ルモノニ無レ之候。膣前ノ大広間 Vestibule ニハ容易ニ入ルモ、膣口ハ狭キモノ故決ノ舌ガハ入リ得ルモノニ無レ之候。故ニ（大広間ニハ感覚サ迄ナキモノ故）吉舌ヲ舐ルモノトスル外ナシ。羅甸語デ Fellatores（フェルラトレス）抔名テ此事ヲ業トセシモノサエアル由、羅馬帝国ノ詩ニ見ユレ𪜈、ソレラモ大法螺的ノモノ多キ故分ラズ。又印度ノカマテヴア経ニハ其方法ヲ明記迄シテアルガ、実際行ハレ得ヌ事ト存候。兎ニ角ト一ハ一ハ秘密事ニテ、其行儀事相ハ分ラズ、然シ此事ハ必ズ師授ヲ受ネバナラヌ事ニモ無イト見エ、一向遊女ナドニ関係ナキ

輩ニモソココ、ニアル与見レバ、事相上ノ事デナク精神上ノ事ト被二察申一候。乃チ同臥スルトイフホドノ事ニ止ルモノ多キ事ト存候。見世物ハ欧洲ノ大都会大抵ノ処ニアリ。コレハ一向アテニナラズ。

「舞子ノ浜」云々ノ歌ハ古ク与アリ、古イノニハ「ヘリ」ハ松原ト有レ之候。大陰唇ヲヘリトイフ事モ古ク見エ申候。

アリノトワタリハ会陰 Serotum ニテ、コレハ蟻ノ唐渡リトイフ義ト見エ、狭キ処ヲイフ様ニ候。ツラタリ乃チ Fourchette ト肛門ノ間ダノ堅キ谷ヲ申ス。平賀源内ノ『虱ノ道行』ニモ、蟻ノトワタリ伏拝ミトアリ、古キ詞ト見エ『西行法師一代草紙』トイフモノニ有リシト記憶致候。

縮ミ女ハ助兵エナリト当地方ニテ申候。縮ミ女ヲ男ガ好ム事ハ其碩自笑ノ書ニ屢ハ見エ候。又足ノ親指ノ反タルヲモ好ム由見エ候。但シカ、(ママ)女ハ味ヨシトイフノカ好淫ナリトイフノカ小生ニハ分ラズ。

大陰唇・小陰唇、此二物ヲ貴地方ニテ箇々ニ呼ブ詞アリヤ。当地方ナドデハ古来其名トテモ別段ニ無キ様ニ候。山岡明阿ノ書シモノニ、ヒレ・ハタヒレ（鰭、側鰭）トアリシ様記憶致候。

越後デ玉門ヲ（チヤンベラデナクテ）ベツチヨウト呼ブ由、『松屋筆記』ニ見エ候。

伊太利ニチ、スベオ Cicisbeo ト称シ、人ノ妻ト見レバ仰敬愛讃メツキマハルモノアリ、別ニ姦通ヲ承ルニ非ズ。タヾ人ノ妻ニ愛サレタキナリ。カ、ル風ノモノ王朝時代ナドニアリシカ知ラズ。江戸時代ニモ今モ日本ニハナキ様ナリ。コレモ右ノト一ハ一ト同ジク、一種国ニヨリカハツタ好ミガ行ハル、事ト被レ存候。日本ナドニハ訳語モ一寸出来ズ候。大詩人ペトラルカハ尤モ有名ナモノデ、其大詩ハミナラウラト称スル（夫アル）婦人ヲ慕ヒ念フテ賦シタルモノニ候（別ニ貸姦通モ何ニモセザリシナリ）。チ、スベオハ豆ノ義ニテ、Chich-Pea ト英語デイフ小粒ノ豆ニ候。日本ニテ豆男ナドイフト似タル事ナガラ、小生ニハ何故ニカ、ル名ヲ付タカヲ解セズ。又実ヲ申サバ『伊勢物語』ナドニアル豆男ノ義ヲモ解セズ。女ノ事ト成タラヨクマメニ走リマハルトイフ義ト異ふケレド、何故健(シタタ)カノ義ヲマメトイフカモ分ラズ候。是レモ豆(マメ)ト健トハ例ノ音ガ違フカラ豆男ノ豆ハ豆穀ノ豆ト別義カトモ存居候。

鬼ノ瘤(コブ)トリノ話シハ『宇治拾遺』ニ記スル所尤モ古キモ、元和中成リシ『醒睡笑』ニ此話シ二条ヲ出ス。ソレガ尤モ広ク俗間ニ伝ハリシモノト被レ存候。『拾遺』ノトハ少シ違ヒ申候。尤モ『醒睡笑』ノ作者安楽庵策伝ハ『宇治拾遺』与トリ出シタル事疑ヒナシ。ソハ此他ニモ『拾遺』ニ出タル話シヲ多ク『醒睡笑』ニ、或ハ其マ、、或ハ少シ作リカヘテ出タレバナリ。

カゲマ茶屋トイフモノ東京・京都・又大坂ニアリシ事ハ小生知レリ。又紀州高野山ノ僧ガ往復スル河内辺ノ小駅ニモ多少アリシ事モ知ル。此外ニ、四国九州等ニモ多少有シ事ニ候ヤ。小生ハ一向知ズ。小生明治十五年春高野山ニ上リシ頃迄ハ、（売物ニハ非ルモ）高野ノ寺院毎ニ小姓アリ。其節宝物ノ展覧会ヲ五十日斗リ行ヒシニ、無数ノ霊宝ノ説明ヲスルモノハ、ミナ各寺ノ小姓ナリシ。又小生宿リシ寺院ニテ飯ノ給仕モ小姓ニテ、中ニハ丸デ十七八ノ娘ノ如ク柔カナモノモアリシ。然ルニ明治十九年小生渡米前ニ只今東大ノ農科大学長タル川瀬善太郎博士ト登山セシ片ハ、モハヤ小姓少ナクナリ、当

時高野山大衰微ノ折トテカ、奥ノ院大師廟前ニ人一人モナキニ、十八九才ノ極メテ色鮮カニ紅ヲ帯タル青年ガ、破レタル単衣ヲ絡ヒ、虱ヲトリ居ルヲ見タリ。是レ等ハ寺デ食ヘヌ故、半乞食ニナリ居リシナリ。

二三年前二度登リ、法主ハ小生ノ旧知故金剛峯寺ニ尋シニ、法主ノ側使ヒニヤハリ小姓如キモノ一人アリ。ソレハヤヽ柔カナルモノナリシガ、其他ノ五六輩ハ丸デ只今申ス不良少年又ハ壮士如キモノナリシ。故ニ小姓トイフモノ実際跡ヲ掃ヒシ事ト存候。四国九州ニ今ニ小姓ヲ使フ寺アリヤ。彦山ナドハ昔シハ大寺ナリシ故、無論有リシ事ト察し候ガ、只今ハ気ケニモナキ事ト存申候。

小生ハ従来粘菌トイフ一類ノ生物ヲ専門ニ修メ居候ガ、九洲ノ粘菌ハ十年斗リ前筑前ノ黒崎町トカイフ地ノ岩崎一二トカイフ農学士ガ纔カニ極メテ普通ノモノ三四種送リクレタル外ニ見シ事ナシ（只今日本中ニタシカニ百四十二種アリ。其内十八種ヲ除キテハ、ミナ小生ガ見出セシモノナリ。此事世界中ニ名高シ）。何卒貴君ニ貴地辺ノモノヲ集メモラハント存候ガ、現ニ標品ヲ一覧ノ上ナラデハ分リカヌルモノナリ。小生三月ニ和歌山へ之キ、集金ノ上イヨ〳〵研究所確定セバ、日本現在ノ諸粘菌属ノ代表品ヲ三四十点送リ可ニ申上一間、ソレヲトクト御覧ノ上、採集ノ送リ被レ下度候。日本デハ博士トカ学士トカ、大学教育ト科学ノ進行ヲ混視シ、博士学士デナケレバ学問ハ出来ヌヤウニ思フ風也。是レ大キナ間違ヒニテ、何タル発見発明ナキハコレニ由ル。学位ナドヲヒケラカス輩ハ学問ヲ持久スル事ナラズ。イハヾ学問ノ小売リ取次ギ店デ、学問材料ノ製造人ニモ製造所ニモ非ズ。ダーウヰン、ワラス、スペンセル何レモ素人学問Amateurナリシ（Amateurは素人学問ノ義ナレド、只今ニ至テハ此内カラエライ奴ガ輩出スル故、独学者と訳スルガ至当ナラン）。西洋ニハ学問デ飯クウ為ニ学問セズニ、学問ヲ一生ノ楽ミトスル人多シ。故ニ学問ガ悠々トノ真実ノ域ニ進ムナリ。吾国ニテ近ク研究所ナドイフモノ多少出来タガ、其主宰タル人、何ノ科学ノ心得モ嗜好モアルニ非ズ。慈善会、救恤部同然ニ外国ヘノ広告カタ〳〵コンナ名ヲ立テタトイフ斗リナリ。サレバ其研究所員トイフモノ実ハ是レデ俸給トラン為ノモノ斗リデ、某博士某教授ナドガ落語家ガ寄席ヲマハル如ク、ソノ検究所ニ一時間、ソノ研究所ニ一週ニ二時間ト顔ヲ出し、其門ヲ出レバ忽チ其事ヲ忘失シ了ル。イハヾ烟草ヲ飲ミニ立寄ル様ナモノナリ。小生ハ貴君ガ何ヲ正業トセラル、カヲ詳カニセヌガ、何卒正業ノ余暇ヲ以テ、倦ズ怠ラズ、科学ノ方ニ鋭意尽力サレン事ヲ望ミ申候。

早々敬具

宮九（三月一日付封書）

大正十三年三月一日

前略　御垂示の大学教育と科学の進行とを混視し云々、至極同感の至に存じます。又仰せの通り、我国にては飯喰ふ為に勉強する者多く、真に学問の道を楽しむ者少きは遺憾に存じます。扨て菌類研究の事、私も余暇あらば、やつて見ようと思ひます。私には会社つとめの忙しい本業はあれど、是は糊口の資を得る生活の方便で、道楽は読書と遠足とです。学校教員や官吏の如うに落付いて勉強出来る

程の時間の余裕を持たない事が実にツライですが、然し是でも極力時間を経済的に利用して、人並以上に勉強には苦労してゐるのであります。科学は素より大好き、基礎知識は皆目ないですが、又色々雑書を翻くことあるも、いつも自分の好きな土俗研究に参考となる事はないかと言ふ調子で書見しますので、動もすればJack of all trade and Master none の傾向に陥入るのではないかと、うれひてゐますが、しかし何を研究しても損な事はなく、人学ばざれば殆しと言ふのが、私の主義であります。

かげま茶屋の事、四国並に九州には無レ之、鹿児島の如きは女色よりも男色を普通としますから、かかる茶屋の存在を必要としません。曽て『民族と歴史』に掲げし如く、此の地方にては女色を却て、聖書の句をつかつて申せば、Strong fleshとしますから、是を一名和蘭チゴと称する位です。よく、じやうだん咄に「さる男、オカマにのみ耽るので、女房を持たさしめしに、此男女房のオカマばかり掘る故、女房こらへかね、逸物を前に入れしめしに、男、成程こんなよか事、盆と正月だけにしようとて、矢張尻つく事はやめなかつた」と。友人の知合に故人となりし老船長あり（此の人の顔は、私も見覚えあり）、家内を持ちながらチゴを内にいれ、男色に耽るので、妻もヤケ気味となり、巡査と私通して離縁となりたる事実あれば、右の笑ひ咄も仝地方の風俗を語る一つの種となります。

寺の小姓も最早なく、何にかに会式のとき、オチゴさんと称し、小娘の髪をチゴマゲに結ひ、盛装して列せしむる風があるばかりです。十八年間ばかり文通せざるも友人松岡寿八（今どこかの副領事してゐる由）、曽て満鮮旅行し、寺院に宿をかりしに、夜分十四五歳の小僧が添寝に来り、言葉不通なりしも、後に是は優待のつもりで、主人が侍せしめしを知りたりと、いづこの地方なりしか聞き洩らせしも、マルコポロの旅行記に、外来者に女房を侍せしめて優遇する咄あるが如く、面白い事と思ひます。

彦山の研究は却々の一仕事で、峯入に就ても、私は色々面白い咄を耳にしてゐまして、是非暇あらば、今一度出かけたいと思てゐます（佐賀県にては、此山への一度詣りを忌み、是非二度詣るべきものとしてゐます）。あれだけ修験のやかましいお山にも案外立川流が侵入した咄もありまして、男色よりも一方が熾んな事はなかつたらうか、取調の必要はある如うです。現在の宮司高千穂男爵は、昆虫研究に趣味をもたれ、当郡（企救郡）城野の出身、帝大の矢野理学士（昆虫研究家）と親交ある由なるが、お山の研究は余りしてゐないらしいです。

話異い、豊前宇佐郡竜王村に明満寺といふ禅寺があります。知合の老人から一度行かれよ、と言はれてゐながら、未だ行く機会がありませんが、此の寺に四つのつりてを吊れば、幽霊の出るといふ生絹の蚊帳があるそうです。伝説では、伊予の和霊さん、乃ち宇和島の家老山家公頼は、此の蚊帳の中で殺されたもので、どういふ事情で此の蚊帳が九州路へ渡来したかは不明だが、元は安心院村のあがた屋と曰ふ質屋が手に入れたところ、四つの釣手をつると幽霊が出るので始末に困り、此の禅寺に納めたものじやと言ふ。一説に、此の蚊帳は中津地方にも売物に出たが、その時は彦山の座主から転々したもので、是をつれば「蚊帳故に」と曰ふ女の恨み声したとの話もあります。昔の神主は神をダシにつかつて、人身御供とかなんと

か旨い口実を設けて、女をチヤロマカス事は茶飯事と心得た形跡がありますから、蚊帳の中で女を殺す事位はやりかねぬ仕業で、此の蚊帳にもなにか因縁があるのかも分りません。いづれにするも此の蚊帳は、一方の釣手をはづして置けば変異はないが、四隅をまともにつると亡霊が出ると言はれ、是よりして蚊帳の三方つりは豊前では忌むと、私の知合の老人（豊前豊津出身の人なり）から語られた事があります。

『土の鈴』で「銀杏の実」に就て面白い咄を承りましたが、貴藩にて銀杏壷といふを使用した例は御座いませんか。高松藩にては、藩主並びに連枝は、食事のとき先づ此壷中の銀杏に箸を小擦りたる後、食事する風がありました。是は銀杏は毒消しとなるとの言伝へがある為だそうです。私は『土の鈴』が休刊となりましたから『民族と歴史』改題『社会史研究』に投稿して、各地から銀杏壷の有無を問合せたかつたのですが、此の雑誌も震災に祟られて『歴史地理』に併合せられ、其侭となりました。

丸善のカタログを見しに、Mycologia と曰ふ雑誌の発行せらるを知りました。是等は菌類研究の雑誌で在りましようか。

高松で法事に引菓子として用る饅頭は、卵形若は普通桃の恰好した上図の如き中凹のあるもの多く、是を饅頭屋に注文すると手塗又はラデンの大箱にいれ、沢山の桧の葉を折敷にして持て来ます。（此の大箱は後、饅頭屋に返す）。『風狂文章』饅頭の解に「一枚の鱗なくして嘉儀を呈し、常に青貝、ふせの器に養はれ、桧葉の折敷は、たれか其好にまかせ侍りけん云々」とあれば、此事は高松に限られたる事には非らざるべきも、何故仏事に饅頭並に桧の葉を折敷にするのでしようか。『梅園日記』に「諸葛亮が孟獲を征して、蛮神を祭るに人の頭を祭る風ありしを廃し、羊と豕との肉を麺に包みて、人の頭にかたどり祭りしといふ説を僻言なりとし、又我国で饅頭の始は、建仁寺の竜山禅師が宋から帰朝のとき、林浄固を伴ひ帰り、此男南都で饅頭を製し、売つたのが始めじや」との説あるも、仏事に之が顔を出した事に就ては、明確な記録はないやうに思ひます。

憶測するに此饅頭は女陰を象り、見るから目のさめる如うな生き〳〵した桧の葉は生を表現する為に添えたものでありますまいか。乃ち英国にて、寺領の住民が過越祭（イースター）に坊主に贈る菓子は、女陰を表はす卵形のものたりしと言ふと、東西揆を一にするではありますまいか。

又南欧でマリアの護符には、堅固の松柏類の表号があるそうですが、此の我国の桧の葉も、生命の樹（Arbores Vitae）の意義で、仏事に用らる如うになつたものでありますまいか。御高見伺上げます。

二月中殆んど天候不順でして、山川に出かける事が不能でした。小倉紫川海苔のとれる木町（キマチ）付近は、海岸より遠けれど、尚純淡水とするに躊躇しますので、是が採収は見送り、是より三里奥の水源地付近を近々歩るいて見ようと思つてゐます。本日は是にて失礼致します。

南方先生　侍史

友人、佐藤清より貴所基金として、一円貰て来ましたから、少いけれど御受取り願上げます。金時計ぶらさげて空威張りしてゐる奴は

皆目相手とならず、金のない素寒貧に頼むと、心よく金高は少いが、出してくれるのが嬉しいのです。

南九（三月三日付封書）

右受領証ハ此マヘヲ御切リハヅシ、御送達奉二願上一候。

大正十三年三月三日夜十二時　　南方熊楠　再拝

宮武省三様

拝復　三月一日出芳翰今朝拝見。例ノ通リ事多ク、只今深更ニ及ビ漸ク本書認メ差上得申候。貴書ニ、貴下ハ会社勤務ノ由承聞致候。小生研究所ニ賛成ノ出金シクレタル人数ノ内、半分ハ会社員ニ有レ之、小生驚ク事ハ、（東京ニテ）学校ニアル人々ガ学問ヲ一向出精セヌニ、繁務ノ会社員連ノ以テノ外、学問ヲ好マル、事ニ御座候。尤モカ、ル事ニ不出精ナルハ官吏ト商人乃チ商店又会社ノ頭分タル人々ニ御座候。貴下遠足サル折ニモシ菌類見当ラバ御送リ被レ下度候。ソノ前ニ小生ゟ大体菌類ノ大綱ヲ示スベキ標品ヲ可二差上置一、ソレヲ範品トノ御集被レ下候。右ノ佐藤君ゟノ御寄付金ハ殊ニ難レ有ク、寄付金額ノ一部分四百八十九円迄集マリ居候処ロ、此一円ヲ合ノ丁度四百九十円ノ完数ニ相成リ預入ニ都合至極ニナリ申候。

貴書ニ見エタル満州地方ニテ小僧ヲ出ノ泊客ヲ懇待ノ事、コレハ支那書ニ北辺ノ事ヲ記シタル内ニシバ〳〵見エ申候。塞外ヲ旅スル商旅ノ隊ノニセ物アリ。ソノ内ニ美少年ヲ編入シオキ真ノ商旅隊ト同泊ノ節、其少年ヲノ枕席ヲ富客ニス、メシメ色々ノ騙リ又賊行ヲナス由、日本ニモカ、ルモノ有シ事昔シノ小説ニ見エ申候。寛延四年板『万世百物語』四ニ、越後村松ノ士大野某勤番ニ江戸ヘ上ル途中、信州柳ノ宿デ十七才斗リノ美少年一人旅装ノ困リタル体デ憩フニアヒ、道ツレトナリ色々聞クニ、長岡ノ士ノ子デ神川三之丞トイヒ、子細ヲ語ラズ、人ヲ打テ江戸ノ伯父ヲ尋ルモノラシキ言ヒブリ、ソレゟ親シクナリ、明日ハ江戸ニ入ルベシトテ板橋宿ニトマル。其宿デ酒ヲノム内、少年「言ノ葉ノカレナン秋ノ始メトヤ、袖ニ涙ノ先ヅシグルラン」ト書ク、ソレゟ色々尋ルニ此少年実ヲカタル。吾ハ旅人ヲハギトル盗賊ノ一類也。吾美貌ヲ餌トノ旅客ニ心ユルサセ、機会ヲ見テ其室ニ同類ヲ案内シ入レテ殺害シ財ヲ奪フ。此程中モ外ゟ同類ガ相図ノ我ニ迫ルヲ貴下ノ情ニ羈セラレ、一夜延シニ今迄ノバシ相随ヒタルナリトイフ。朝ニナリテ記念物ヤリテ見送ルニ、凶相ノ男五六人、此少年ヲ不興気ニ取巻キツレ去ル。イカナル目ニアフタカ心元ナイト書キ居リ申候。

マルコノ記ニアル旅客ヲ好遇セシ中亜細亜ノ風ハ、之ヲ以テ銭モウケニシタルラシク候。元世祖之ヲ夷風トノ禁セシニ、此事止メテハ所ガ立チ行カズト哀訴セシトアリ。紀州東牟漏郡ノ某々ナトイフ所ハ比屋娼楼立チアリ。小生タヾノ料理屋ト思ヒ入テ食事セシニ、丸デ女郎屋立チナリ。其後不思議ニ思ヒ故老ニ聞キシニ、昔シハ此所ノ娘共ミナ旅客ニ肌ヲユルセシ。其銭モウケ多キヲ所ノ風トノ尊ビ、良家ゟ求メテ妻トセシ由。小生旧知ノ人デ十年斗リ前北米ニ客死セル人アリ。右ノ地トハヨホド隔タリ居リ豪家也シ。此人ノ父若キ片右ノ所デ、尤モヨク働ラキタル娘ヲ望ンデ（身代大不似合ナルニ）此豪家ノ内室トセシ由。家ノ為ニ身ヲ捨テ、衆多ノ気ノ知レヌ

客ノ気ヲトリシモノナレバ、必ズ家政モチハヨカラント、其父乃チ小生知人ノ祖父ガ望ンデ、其娘ヲ妻ニ迎ヘシメシトイフ。物ハ見ヤウ聞キヤウト存ジ申候。又昔シ大船頭タリシ老人ニ聞シハ、出羽ノ某所ハ諸国ノ船頭ガユクト、所ノ娘共ミナ来リ、草履トカヲサ、グ。丁度只今此辺ノ旅宿ノ宿引キ女ノ如シ。ソノ内自分ノ好ミ次第ノ草履ヲハクト、ソノ草履ノ持主タル娘ガ案内ノ其舎ニツレユキ、忽チ針箱ヲモチ来リ、洗足スムヤ否船頭ノ衣類ノ補縫ニトリカ、ル。ソレ与其船頭ノ滞在中、全ク其妻タリ。貞実懇遇極マル。扨船頭商事済デ去ルニ臨ミ、所獲ノ金ノ幾分トカヲ其女ニ与フ。其女ソレヲ蓄ヘテ、多ケレバ多イホド働ラキノアル女ト賞メ、富家与妻ニ求メラレタル由、丸デマルコノ記載ニ仝ジ。タヾマルコノハ妻モ娘モツトメタラシイガ、コ、ノハ娘ニ限ルヲ異ナリト致候。近年小生ノ知人此辺ノ者、ココニ至リ妻ヲトリ、ツレカエリシニ、ヤハリ今モ其余習アリト見エ、毎朝早ク起キ湯ヲワカシ、手ヲツカエ夫ニ向ヒ「旦那様、オ湯ガ沸テムリマス」ナドイフ。其貞節ノサマ、右ノ話シニカハラズ。西郷南洲ガ島ニアリシ片、アイガナトイフ女子ヲ娶リシ抔ヲ、南洲ハ三年間女ノ辛抱ガ出来ナンダカナド訝カル人多キモ、小生其辺ノ事ヲ聞シニ、其人語リシハ、島デハ娘ヲ一人妻ニセネバ、誰一人家ヲマカナヒクレル人ナキ所ナリシト云ヒ候。アフリカ抔旅行セシ人ニ聞クニ、今モコンナ風ノ所ハ極テ多イ様ニ候。宿トイフトコロアリ。其所ノ男子ハ漁ヲ事トシ、他ノ漁民トカハラザルニ、婦女子ハ何レモ極テ優美ナリ。以前ハ（今モ多少）何レモ年頃ニナレバ京都ヘ奉公ニユキシトカニテ、言葉ノヤサシキ事当町ノ婦女ナド遠ク及バズ。昔シ熊野詣デ盛ンナル片、九十九宿アリシトカ申ス。

是レモ右ノマルコノ紀行流ノ風アリシ所ト存候。宿ノ長者ハ女ニテ大将貴人ナド来泊スル毎ニ一夜ノ妻タリシナリ。頼朝ノ兄義平・朝長共ニ宿ノ長者ノ子ニテ勇士タリ。其他ニモ宿ノ長女ノ生ダ子ニテ、名門縉紳ノ子ト称スルモノ多カツタベク、トツケモナキ田舎ニ大臣・卿相・将軍・勇士ナドノ後アルハ、皆迄ウソニモ非ルベク、戦争盛ニナル世ニハ、ドコモコ、モ乱暴強姦サル、ヲ防グ避雷柱トノ、欠ク可ラザル一具タリシ事ト存候。印度ナドニモ、古ク有数ノ美女ガ生ル、毎ニ（大富家ニテモ）、一般人民ガ其家ニオシカケ、此娘ハ是非娼妓ニシテクレト、ムリニ娼妓ニスル風アリシ事仏経ニ見ユルモ、実ハ征伐ニ来ル王ヤ将軍ニ因ンデ、ソノ手デ一般乱妨ヲ免カル、為ナリシト存候。

蚊帳ノツリ手云々ノ話シハ面白シ。左様ノ兇状持チノカヤヲ釣ランデモヨイヂヤナイカ、故ニ此話シハ虚作ナドイフ人モアランガ小生ハ左様思ハズ。昔シハ蚊帳トイフモノ甚ダ手ノ込ンダモノデ、中々安値デ誰レ彼レト一般ニ買ヒ得ズ、余程之ヲ尊ンダモノデ、カ、ル凶話ノ付タカヤスラナホ用ニ立テシ事ト存候。膳椀ヲ願ヘバ貸ス穴ナドノ話諸国ニ多シ。コレ抔モ、膳ハ五十銭、椀一ツハ三銭デモ買ヘルヂヤナイカ、今サエソノ通リ、況ムヤ昔シハズツト安値ダツタニ、何ヲ苦ンデ、ソンナモノヲ証文迄書テ借ラウカ、トイフ人アリ。コレハ今ヲ以テ古エヲ推測スル誤リデ、実ハ昔シハ、草ノ葉・木ノ葉ニ食ヲ盛テ食ヒ、膳椀ナド中々凡民ノ手ニ入ラズ。之ヲ用テ客ヲ饗シ得ルヲ大名誉トシタル事ト存候。柳田氏ノ椀貸シノ話（数年前大毎紙正月号ニ出タリ）、此事ヲ言ハヌ故、何ノ為ニ膳椀ニ限リテ借リタカ分ラズ、ソンナモノヲ借ル与金銭ヲ借リソウナモノナドイフ

ナリ。小生方ニ今ゟ七年前ニ奉公セシ当時十七オノ下婢アリシ。ソノ女ハ当地ゟ纔カニ一里半斗リノ地ニ生ル。此女ハ其村ノ小学ニテ優オナリシ。然ルニ小生方ニ来リテ、シチリント申シ、貴地デ何トイフカ知ズ。茶ヲワカスニ用ヒナドスル＊コンナモノヲ、初テ小生方デ見タル由。扨食事オハリテ洗滌スル＊＊コンナ台ヲハシリトイフ(水ヲ走ラスノ義カ)。ソレヲ此女ガ八リントヨブ。妙ナ事ト思ヒ尋シニ、「既ニ七リンアル上ハ八リンモアルベシ」ト推測ノ言フタトノ事ナリシ。ワリス氏 A ·R ·Wallaceガ南洋ノ何トカイフ島ニ三百年来、毎週トカニ一度オランダノ船ガツクニ、島民洋船ノ内部ヲ見ズ、又見ヨウトモ望マズ、種々奇怪ノ説ヲ付シテ怪シミ記シ居ル。ソレト同ジク此田辺町ハ三百年来兎ニ角一藩ノ領主ノ居リシ所デ、諸国ノ船舶絶エズ来ルニ、纔カ一二里隔テシ所ニカヽル僻地アルモ面白シ。扨其下女ノ家デハ、ワリバシヲ吾レ〳〵ノ家ノ如ク、一度

＊

＊＊

食事ニ使フテ忽チ捨ルトイフ事ナク、洗ツテ収メオキ、客ヲ饗スル片又之ヲ使フ。客人ハ喜悦ノ、大事ニ拭ヒオカレタ箸デ饗セラレ、一段感謝スル由ヲ挨拶ノ後ニ食フ由申サレシ。只今モ大抵コンナ風俗ナラン。現前一二里ノ間ダニ、コレホド風俗人情ノ相違アルヲ察セズノ、ヤヽモスレバ(民俗学者ナド称シナガラ)数百年前ノ事ヲ、今日只今ノ見解デ説ントスル大ニ誤レリ。柳田氏ハ其叔父ニ安東貞美トイフ中将カ何カアリ。サレバトテ柳田氏ノ軍学ハ誤レル事多シ。此人ハ、ドノ城ハ城トスルニ堪ヌ所ロ、コノ城ヲ誰ガ守ツタトハ偽リナルベシナドヨクイフ。何ゾ知ン、昔シハ鉄砲モナンニモナク、纔カニ矛刀又弓矢位イノ戦争故、今日ノ軍術カラ見テ、ツマラヌ所ホド守ルニ要害ヨカリシナリ。友人寺石正路氏説ニ鎮守府将軍北畠顕家卿ノコモリシ霊山ノ城ナドハ、至テ雲深キ山デ、今ゟイハヾ山賊ノ所位トシカ思ハレヌ由。

又一ツ所謂民俗学者ノ僻ハ(故高木敏雄氏ナド其魁タリ)A Priori的ニ幾何学如ク推理ノ、ハリコミヲクラワスル事ナリ。琉球人ガ蟹ノ児ノ健走スルニチナメトテ、子ヲ生ムトスグ小蟹ヲ其体ニ這ハストイフヲ聞テ、蟹ハ左程健走スルモノニ非ズ。健走スルモノヲ羨シク思ハヾ蛇ガヨカラン、電光ガヨカランナド論ズルノ類ナリ。此事ハ小生曾テ論ゼシ如ク、牡丹ヲ香ハシト思モ梅ヲ香ハシト思フモ、其人ニ又其部落〳〵ノ思ヒ付キ次第デ、兎ニ角当時ノ人ガソンナニ考ヘタトイフ事、若クハ後人ガソンナニ説ヲツケタトイフ事サエ分レバ十分ト存候。乃チ古今人情ノ差異ヲ見ルヲ得ル也。

前日ノ御状ニ見エシ陰唇ノドテハ大陰唇ノ事ニヤ小陰唇ノ事ニヤ。此二者ヲ明白ニ分チ言タル国語ハ甚ダ少ナシ。アラビア人ハ小陰唇ノ黒キヲ尚トブ由明記アル外ニ小生ハ見シ事ナシ。

当地デ銀杏壺ノ事ハ聞カズ。小生ニハ初耳ナリ。

御下問ノ Mycologiaハタシカ米国若クハ独逸発行ノヤヽ古イ雑誌ニテ、主トノ菌学ノ事ヲ論ズルモノニ候。但シ丸善ノ目録ニアルハ日本ニテ新タニ出板スルモノニ候ヤ、小生ハ未ダ知ラズ。

饅頭ハ、只今支那デマントウト申シ、色々アリ。乃チ英語デ申ス Pie ナリ。豕肉・牛肉・鶏肉其他魚肉ノモアリ。色々ノモノヲ餡トスル事西洋ニ仝ジ。形モ千態ナリ。『水滸伝』ナドニ人肉ヲ入レシ事アルモ、今日米国ナドモ人肉ヲソーセージニ入ル、事偶々アルヿ推サバ、必無キ事ニモ限ルマジ。ソレヲ日本デハ元来獣畜ノ肉ヲ不浄トシ、又一ハ饅頭ニ入ル、ホドノウマキ調理法ヲ知ザル所ヿ、禅僧ナドガ多クノ果子類ヲ輸入伝来セシ片ヿ専ラ小豆ヲ餡ニノ饅頭トヨビシ事ト存候。牛皮糖・鼈羹・羊羹其他足利氏時代ノ禅寺ニ用ヒシ果子類又料理類ニ肉類ラシキ名アリテ、何レモ葛ヤ小豆ナド精進物ヲ用ヒテ、肉ニ擬シタル事『嬉遊笑覧』等ニテ分リ申候。法事ニ貴示ノ如キ果子又饅頭用ル事ハ当地モ仝ジ。檜葉ヲ敷ク事モ同ジ。又其他ノ形ノモノモ色々アリ。悉ク女陰ニ象ドレリトハ思ハレズ。タヾ景気ヨキマヽニ用ヒ来レル事ト存候。昔シ吉祥ニ因ミテ桔梗花ヲ屋号ヤ家紋ニ用イ（吉凶ノ音ナレド無学ノ世ニハ吉凶ヲ吉兆ノ事ト解セシナリ）、盛満ノ相アルニ因テ、牡丹ヲ用ヒナド致セシ事ト存候。エンサイクロペチア・ブリタンニカ十一板ニ、何物ヲモ陰陽ノ相ニ基ク如ク説クハ、説キ易キモ、実ハ言ガ実ニ過ギ居ルト云ルハ尤ナ事ト存候。常葉木ノ葉ヲ食物ヲ敷クニ用ルハ温帯国デハ大抵同ジ。コレハ利害上ノ事デ忽チ萎エ巻キ上ルヤウナ葉ハ甚ダ不体裁デ食物ヲ汚シ美観ヲ損スル事ニ候。檜ハ学名Thuya希臘語ノ$\theta\upsilon\omega$（ツオ）牲ノ義ニ候。此木ヲ古エ、犠牲ヲソナフル節焚キテ、香烟（カウ）ヲ神ニ呈セシナリ。常緑ノ上ニ多少防腐ノ効アル故、食物ニシク事ト存候。エデン楽土ノマン中ニ生タトイフアルボア・ヴヰタエ（Tree of Life）ハ天ニ聳エタ巨樹デ其根元ヿ天下ノ水流出シ、人間五百年カヽラネバ其グルリヲマハリ得ズト云フ。是レハ何ノ木ヒ分ラズ。後人印度ノ菩提樹ナルベシトカ、バナヽナルヘシトカ種々論アレド、イハヾアテモナキ尋ネ物也。只今アルボア・ヴヰタエト呼ブハカナダ産ノモノデ、コレハ其実ヲ強心剤 Cordialトノ尊ビシヿ名ケシモノナラント英国ノフォーカードノ説也。故ニ貴書ニ察セラル、ヤウナ意義ハナカルベク被レ存候。ラウドン説ニ此（カナダ産）ハ沼沢ニ生エルモノデ、大分吾国ノヒノキトハチガイ申候。欧洲ヘハ仏国ノフランソア第一世ノ時初テ入リ、フォンテンブリユーノ植物園ニ植ラレタトアリ、然ラハ十六世紀ノ事デ、先ハ其頃聖書ノ伝ニアルボア・ヴヰタエノ名アルヿ取テ此木ニ付タル名ト被レ存候。アマリ古カラヌ名ニ御座候。丁度吾国ニ OE nothera（Evening Primrose）ガ安政頃入リシニマツヨヒグサトイフ名ヲ付タル如シ。夕刻ニ花咲ク故ノ雅名也。雅名ナルニ相違ナキモ之ヲ以テ待宵ノ侍従ニ縁アルモノト思ハヾ誤レル如シ。只今此地ナドデ専ラ夕顔ト申スハ徳川氏ノ世ニ渡リシ丁番茄児（チョウジナスビ）、又ハリアサガホト申シアサガホ、ヒルガホノ類也。之ヲ光秀ガアラハレ出タル夕顔棚ノ夕顔ト思ハヾ大ニ訛マル。況ンヤ源氏物語ノ夕顔ト思ハヾ一層甚シ。

貴地方ニハ今モ鉄漿（かね）ヲ歯ニ伝ル婦女相応ニ有ル事ニ候ヤ。当地町内ニハ殆ド絶無。タヾ一部漁婦ノ中ニ二三人見受ケ申候。然ルニ小生一昨年友人三輩ト日光山ニ遊シニ、馬返シノ道路ヲ夥キ女勢ガ行列シ来ルニ中年モ若キモミナ鉄漿ヲツク。之ヲ聞クニ何レモ奥州人也。中道等氏ニ聞合セシニ、津軽青森辺ニハ今モ此風専ラ行ハレ、既ニ一昨年トカモ、同氏ノ兄トカノ内ノ妙齢ノ下婢、男ト走リシニ、モハヤ、鉄漿ツケタル上ハ添ハセヤラネバナラヌ、ト議定セシ由申

来リ候。之ヲ以テ考ルニ、彼辺ハ当地トチガヒ、既ニ汽車モ通ジアルニ、此様次第、風俗トイフモノハ容易ニ移ラヌモノト存候。ソレヲ万事万物、露国風ニ改造トカ、英国風ニ作リ立ルトカハ、所詮行ハレザル儀ト存申候。

貴地方ニコンナモノ時ニアルベシ。当国ニモ和歌浦ナドニ時々打上リシ事アリ。近年ハ少ナシ。カブトガニト申ス。雌雄必ズ伴ナヒ游グ故、南支那ニハ婚礼ニ用ル由。此物ヲ筑前デウンキウト申ス由『大和本草』等ニ見ユ。只今モ申シ候ヤ。ウンキウトハ何ノ事ニ候ヤ。和歌山ニ亀ノ事ニ詳シキ人アリシ。ソノ人ニ小生キ、シハ、亀ノ下ノ甲ノ縁ガ玳瑁如ク黄赤色デスキトホレルヲウンキウトイフ由、但しウンキウトハ何ノ事カ分ラズト。一昨年上京中、旅館エ渡瀬荘三郎博士訪ハレシ。此人此カブトガニノ研究ヲノ世界ノオーソリチートナレリ（今ゟ四十年ホド前）。此人ニ聞シニ分ラザリシ。

又貴地辺ニハクラゲヲ食フ由。コレハ別ニ食用スルクラゲ有テムヤミニクラゲサエ見レバ食フニ非ズト聞ク。其クラゲハ大抵直径ドレホドノ大サニ候ヤ。又食ヒ得ルクラゲヲ食ヒ得ザルクラゲト見分ル点ハ如何ニ候ヤ。

小生四十年来民俗学ニ志シ、夥ク其方ノ書ヲ蔵ス（日本デハ第一等ナルベシ）。柳田国男氏ハ篤学ノ人ニテ毎度色々ノ事ヲ問ハレ、小生其都度記憶ノマヽ又書庫ゟ書物ヲ引出し答ヘシヲ、書生ニ筆写サセ五十二冊トカアル由、然ルニ近年眼ガカスミ又記憶モ精シカラズ。殊ニ此三年間研究所ノ事ヲ始メテヨリ彼方ニ専心スル能ハズ、遺憾甚シキモ、貴書ニモ示サル、如ク一時ニ両方ハヤレズ。今夜貴書ヲ見テタヾ思ヒ当ルマヽヲ書キテ御答エ申上候。

早々敬具

下ノ関辺デ、昔ゟ唄フ安来節様ノ舟人ノ唄ニ、ナゾ〳〵ト申スモノアリ。小生当国東牟婁郡勝浦港ニ居リシ時、毎夜下ノ関辺ゟ来ル船人船饅頭ヲ聘シ、之ヲウタフヲ聞シ。先ヅナゾ〳〵ノ効用ヲ説キ、扨一人ガナゾヲ掛ルト船饅頭ガ解キナドスル也。掛ルモ説クモ唄フテスル也(三絃入レル事多シ)。其文句ヲ忘レ了リ候。先日出雲ノ安来ゟ毎度当地ヘ入港スル事務長ニ聞キシニ、タシカニ知ヌナガラニ教エクレタルヲ『集古』雑誌ヘ出シ候ガ、タシカニ安心出来ズ。貴下モシ御存知ナラバ御教エ被レ下度候。貴下ハ集古会員ニ非レバ、彼雑誌ハ未見ノ御事ト察シ、左ニ為レ念全文写シ入ニ御覧一候。コレニテ間違ヒナキヤ。外国ニモ古クコンナ事アリテ謎合戦ナドアリタリ。思フニヤハリ此様ニノ唄ヒハヤシヲセシ事ト存候（Bairi Gould ノ Strange Survivals ニ出タリ）。

『集古』壬戌第四号（大正十一年九月号）

ナゾ〳〵ノ小唄　　南方熊楠

謎の事いと古く物に見エタルハ『散木奇歌集』七ニ、或人ノ許ニナゾ〳〵物語ヲ数多作リテ解セケルヲ、異様ニ解タリケルヲ又ツカハストテヨメル「イカデモト思フ心ノ乱レテハ逢ヌニトクル物トヤハ知ル」。ナゾ〳〵物語ナル名、今モ此辺デアテバナシト云フニ似居ル。『陔余叢考』二二二「謎即古人之隠語。左伝中叔展所云。山鞠窮河魚腹疾公孫有山之呼庚辰其濫觴也。亦曰庾詞。国語秦客為庾詞。范文子能対其三。楚荘斉威俱好隠語云々。

劉歌七畧有隠書十八篇。則并百輯為書者。然皆不伝（中畧）其名曰謎。則自曹魏始。文心雕龍曰。魏代以来。君子嘲隠化為謎語。謎者廻互其詞。使昏迷也。魏文陳思約而密之。高貴卿公又博挙品物。則高貴卿公時又嘗輯之成編矣」。支那デ古ク隠語ト云タモ、ナゾ〳〵物語テフ名ニ近イ。『叢考』ノ考証ニ依テ、古ク支那ノ謎ノ編集有タト判ル。『叢考』ニ夥シク挙タ例ヲ見ルト、文字ノ国丈有テ、支那ノ謎ハ専ラ文字ノ離合ヲ巧ミニ考ヘ廻シタモノダ。西洋ノコナンドルムニ当ル。西洋ニ所謂リツドル乃チ事物ノ相似ニ因テ謎ヲカケル事、支那ニモ在ヤ。只今其例ヲ見出シ得ズ。嘲詞謔語抔ニソンナ例頗ル多キモナゾヲカケルトハ別也。

扨『庚申』第一号十三葉裏ニ、「東牟婁郡勝浦港抔ヘ船ガ碇泊スル時、売女集リ来テ三絃弾キ騒グニ、ナゾ〳〵ト云フ歌アリ。最初ニ「座付キ」体ニ、ナゾノ面白キ事由ヲ一寸序シ唄ヒ、其ヨリヒトリ〳〵謎ヲカケ、一人之ヲトク。掛ルモトクモ唄フテスル也。客多キ片ハ順番ニ唄ヒ抔ス。是ハ十四五年前迄ノ事、今日ハ存ゼズ候」ト出シ置タガ、頃日安来節上方ニ大流行シテ、此田辺ニ及シ、拙宅ノ近所ニ曽テ本家本元ノ安来辺デ七年間二枚鑑札ヲ営ンダ年増女ガ移住シ来テ、時々三味スルヲ聴クト、件ノナゾ〳〵ノ唄ハ全ク安来節ニ違ヒナイ。因テ彼地生レノ摂陽商船株式会社紀伊川丸船長（事務長ノ間違ヒ）杉山康智氏ニ頼ミ、調査シ貰フタ処ロ、大正六年六月雲州安来町山本書店発行、安来節正調ノ家元渡部オ糸著『心調安来節』（ゲエオデシモ大、八十頁）一冊ヲ恵マレ、今夜（大正十、九、十六）受領シタ。早速通覧シタガ一向ナゾ〳〵ノ唄ハ見エナイ。因テ只今彼地デ廃ツタ事トアキラメタガ、幸ヒニ杉山氏ガ記憶ノ儘ヲ書付ケ、使ヒノ送ラレタ分ヲ左ニ出ス。「ナゾ〳〵カケフカ解ンスカ、トケマスナゾナラトキモスル、モシモトケナイ其時ハ、カケタアナタニ上テキク、サア〳〵オ掛ケヨナンナリト、ソレヂヤ掛マス、トカンスカ、……ト掛テ何トトク、其ナゾ私ノ胸ニナイ、カケタアナタニアゲテキク、其ナゾ私ガ解フナラ……（解答）心ハ……ヂヤナイカイナ」。（大正十一年十一月廿九日門司出、十二月二日受タル神戸南洋郵船株式会社サマラン丸船長長州人安井魁介氏ノ来状ハヤヽ異ナリ「謎々カケルガトカシヤンセ、サー掛ケナサレヤ何ナリト、……トカケタラ何トトク、其ナゾ私ガ解ウナラ……トトクワイナ、ヨウ解シヤンシタ、其心……ヂヤナイカイナ」トイフ風デシタトアリシ）。

熊楠ガ勝浦港デ聞キシ所ハ、最初ニナゾ〳〵ノ面白イ由ヲ序シタ浪速節ノまくらノヤウナ詞アリテ、其中ニ「淋シイ時ノウサ晴シ」抔ト有タ。杉山氏ハ之ヲ忘レタト見エル。兎ニ角是デ弥ヨ出雲ノ安来節ト分ツタ。熊楠ハ取リ所ノナイ男ダカ、壮年来諸方ヲ遊歴シ、自然心ガ剛強ニナリ、余リ物ニ動ゼズ。然ルニ前述ノ勝浦デ夜泊ノ船頭相手ニ森浦ノオ米チフ名題ノ女将ガ極メテ美声ニ、此ナゾ〳〵唄ヲ港内ニ徹ル迄声張リ上テ唄フヲ聞シヨリ、太史公ガ言タ通リ「詩ニ之有リ、高山ハ仰ギ、景行ハ行ク、至ル能ハズト雖モ心之ニ向フ」デ、何卒其文句丈デモ覚エタシト心得タガ、余リノ美声ニ心蕩ケテ一辞モ記スル能ハズ。勝浦ヲ去テ十余年、アハレ誰カ彼唄ヲ唄ヘカシ、文句ヲ授

カラント親ノ敵キ同然ニ心掛ケ居タ処、四五年前ノ春寒肌ニ逼ル一夜、当時平瀬作五郎君ト共ニ攻究シタ松葉蘭ノ胞子ヲ頭微鏡デ一心不乱ニ窺ヒ居タル最中、近処デ彼歌ト同調ノ者ヲ新宮カラ来タ若イ芸妓ガ挽キ出シタノデ一心大乱ニ及ビ、機ニ出テ久シク聴タガ、ナゾ〳〵ノ唄デ無ツタ。太ク失望シ乍ラ森浦ノオ米ノ顔ガ眼前ニチラツキ、夢中ニ成テ書斎ヘ入ルニ、思ヒモ寄ラヌ片隅カラシタノデ、書棚ノ釘ヲ前頭ニ打込ミ、引キ外ストテ一寸五分程皮ヲ剝レ、流血杵ヲ漂ハス体ト相成リ、当時使ヒ居タ是モ同ジクオ米ト云フ十七歳ノ美女ニ手ヲ引レ（乃チ前ニ述タワリ箸ヲ洗ヒ貯ヘ又使フ家ニ生レタ女）二三町距テタ医家ヘ夜中ニ道行セシハ、古今無双ノ烏滸ノ男ト拙妻其他ニ大笑ヒサレタハ、伊賀越ノ静馬ヂヤ無イガ、ドコ迄モオ米ニ祟ラル、男デアル。是ガ為メ松葉蘭ノ研究一時磋跌シ、遂ニ昨年豪洲ノ学者ニ発見ノ先ヲ越レタ訳デ、某如キノ大剛ノ士モ、些細ナ唄ニ顚倒スルハ安来節ニ余ツ程宿対有リト思エル。惟レ昔シツラキアノオルフエウスノルラノ音ニハ、心ナキ樹木モ引カレアリキ、大樹緊那羅王ガ瑠璃ノ琴ヲ奏スレバ、大迦葉モ起テ舞フヲ禁ジ得ナンダソウダガ、頭ニ一寸五分ノ怪我迄シタトハ聞カヌ。カクナゾ〳〵ヲ掛クル三筋ノ糸故ニ張タ心ノ弛ム間モナク、難行苦行ノ甲斐有テ、彼唄ノ大半ヲ杉山氏カラ知得タハ無上ノ仕合セ、付テハ此上、杉山氏ガ忘レタ発端ノ文句ヲ知タ人有ラバ書付テ送リ下サル様一同様ヘ願ヒ上ゲオク。

小生勝浦デ聞シハ明治三十四年カ五年ノ頃也。其頃ハ諸国殊ニ中国筋ノ船頭又土地ノ売女共、此ナゾ〳〵ノ唄ヲ謡ハヌハナカリシ。然ルニ今トナリテハ勝浦ヘ聞合スモ知タモノナシ。物事ノ忘失サレ行クハ随分速カナル事ト存候。

再白

宮一〇（三月九日付封書）

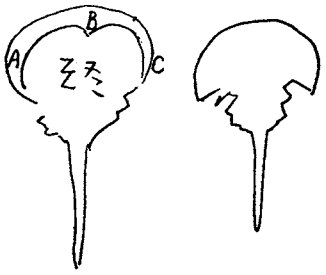
大正十三年三月九日夜半（走りがき御推読の程希上ます）

三月四日付玉書難レ有拝誦致しました。毎度の事ながら色々御示教に與り御礼の申様も御座いません。扨て友人三浦健一氏より別封の通り、五円拾五銭寄越しましたから御査収の程願上げます。十五銭といふ端した金のつくのは、為替並びに郵送料のつもりで、態々別途にくれたのですが、本人の心がけが余りにやさしいから此の十五銭をも、貴所の資金の一に加へて貰ひたいと思ひ、併算した次第です。

お尋ねの鉄漿つくる女の事、九州ではまだ〳〵見かけます。現に私の宅に出入する近所の婆々は、歯をそめてゐます。肥前佐賀郡地方などでは殊に多くみかけ、更に異風に感ずる事は、かねつけるときは同時に、口紅脂さすことです。是は口嚥脂しないときは「精進がね」と言ひ、忌中の化粧法なりとする風があるからです。尤も忌服と申しましても、親の亡くなつた場合は、五十日間は歯を染めない事となつてゐますが、それ以外は鉄漿つけても差支なく、只日をかぶる（忌服の事）ときは、鉄漿つけるときは、鏡を見ずにする事となつてゐます。此の地方（佐賀郡）では、又歯を染むる日は、菠蘿草を喰ふを忌む事となつてゐます。『和漢三才図会』に「俗伝曰、

染レ歯之日、不レ可レ食二菠薐草一大忌レ之」とありますから、他国でも言ふ事でしよう。鉄漿の秘方は、『中陵漫録』等にも載つてゐますが、又普通いづこの里でも五倍子を用いる事は御承知と存じますが、佐賀地方では、此の実を採収の為、よく山野に出かけます。ところが、此の白膠木の実は、却々人目にかかりにくいので「五倍子は親不孝もんの眼にはかからぬ」などと俗に申します。大阪にては、今日はすたれし事と思ふも、髪結に奉公する娘、腕も出来、年期がくると「半仕舞」とて、一定の期間、半日だけつとめてよい習慣があります。（年期があけて御礼奉公するとき、半日つとめてよいのか、夫とも年期がちかづきて、半日奉公してよいのか、其辺の区別を聞き洩らしてゐますが）此の時に、其の女が眉毛落して、歯を染むる風がありますので、若い娘が歯を染めてゐますと「あの娘は半仕舞じやな」など見知らぬ第三者から評される事があります（十年前まで此の風ありしは、家人も目撃せりと曰ふ）。

カブトガニは、筑前舟越湾付近では「オンキウ」と申します。しかし同じ筑前でも若松より洞海湾一帯にかけては「ハチガメ」と申し、「ウンキウ」と言ふのは、此の「カブトガニ」を裏にひつくりかへして見ますと、雌にかぎり、図中のA・B・Cの如き恰好をなせるものがありまして、B辺の縁をあけて見ますと、中にトロ〳〵したものが入つてゐます。此の臓物を「ウンキウ」と申すのです。「チヌ」釣の餌には、この「ウンキウ」が第一だそうで、洞海湾では、黒崎海岸に「ハチガメ」が多いので、子供等は是をとりに行きます。亀と同じ如ように雌雄かさなりて交尾し、雌は雄を背に負ふてゐるのですが、雄には「ウンキウ」がないから、雌雄同時に捕へましても、雄は捨てられます。なぜ「ウンキウ」と申しますか、私には不可解です。私の郷里高松では「カブトガニ」と申して、多く産し、子供のとき夏は之をよくとりますが、瀬戸内海は魚類が多いですから、食用には余りしません（人によりたべる者もありますが）。筑前舟越湾では是を葱又は「ニラ」と交へて煮て喰ひますし、洞海湾付近でも食用にします。



魚介の方言には、随分私等も頭をなやます事があります。鹿児島では烏賊の一種類に「トンキウ」と呼ばれるものがあります。「ウンキウ」の事も、其謂をお知らせする事が出来ないのが遺憾ですが、一度試験に雌をとらへて、頭部の先端の縁をあけて卵巣やドロ〳〵した臓物のあるのを御覧下さいましたならば、是を洞海湾で「ウンキウ」と呼び、チヌ釣の好餌である事に御興味を惹かれる事もありましようと存じ、御吹聴申する次第です（尤もカブトガニも年々尠くなるそうですから、保護してやらねばならず、夫にしては、此のウンキウがチヌの好餌である事を、大公望連に知らさしめるは無用の殺生となり、禁物と存じます）。

九州で螺の事を「ホージヤ」又は「ホーゼ」など呼ぶ事も、私には意義が十分判りませんが、桂川氏が曾て、九州土俗祭号を発行すると曰ふので、「門司甲宗八幡の放螺と筑後玉垂社のホーゼ」といふ題で「ホージヤ」に関する咄を稿して置きましたが、『土の鈴』も休刊となり、其の儘となりました。

九州にて食用海月は、有明湾産珍重せられますが、私は塩漬のものを食したのみで、生まは未だ口にする機会がありません。生まはあしをとり、薄皮をとり、食塩にてよくもみ洗ひ後、三ばい酢にしてくふそうですが、塩漬の分はどうしてつくるのか、一応調べた上で御返事致しましよう。明礬を少し入れるといふを耳にしたやうにも思ひますが、私の味つたところでは、大して旨いものでなく、只コリ〳〵と音がするのみです。酒党には喜ばれますが、九州では旅館でよく喰はされます。私も耶馬渓の旅館で、又鳥栖駅前の旅館で一泊のときも口にしましたが、家人が未だ喰ふた事がないと言ふので、三年前有明産の塩漬を一枚買ひ、一日塩水につけて塩ぬきし、試食せしめた事があります。門司には時々商店で見られますから、今度見付けましたらお送り致します。讃州高松では、食用くらげを夏に子供がとる事ありますが、誰もくふものはありません。備前では、備前くらげとして食用にします。支那人も海月を好み、上海では白皮子（ペーピーツ）と称して售てゐます。Sir Ray Lankester 著Science from an Easy clair と称します書は、私等素人には面白い読物ですが、此の書中に淡水産の海月の咄がありまして是によります。千九百七年、日本人船長が支那揚子江千哩の上湖湖北省内(in the province of Heipiとあるのは Herpei 即湖北省の事なるべし）で淡水産海月を発見し、是を東京の岡博士（Dr. Okaとあり。名は何といふか私は知りませんが）が、Annotationrs Zoological Niponensesといふラテン名の Publicationにて発表し、発見せる船長の名を冠して、Limnocadium Kawaeiと命名したと出てゐます。豊前では、海月の多い年は寒気が強いと言ひ、備前では烏賊の多い年は雷鳴多しなど言ひ、魚類と天候との関係は、諸国にも色々面白き咄あり、要するに我国の如き海国では、土俗学者にとつても、研究すべき畑は格別多いやうに思はれます。

咄かはり、鹿児島にて「オカマ」の歌に「ちごさまの、すとんと落つるキタゴロの、其のみなもとの穴ぞ恋しき」といふのがあります。キタゴロとは、如何なる字をあてはめるや不明ですが、泥坊の垂れるが如き硬い大糞を言ふのです。そこで、こう曰ふ童話もあります。鯛と蛸と海鼠とが、遊戯の仕合をしようと談合し、鯛、木に登りて「松に月とは如何」と曰ふ。次に蛸、木に登りて「さがり藤とは如何」といふと、最後に海鼠、木に登りて「キタゴロとは如何」と叫んだ、と。是は海鼠のキタゴロに似てゐるところよりして、侮辱してこう曰ふ一口噺が出来たものと思ひます。

膳椀の咄、同感に存じます。筑前黒田家などあれだけ大藩ながら、なんぞ事に侍連を招待するとき、膳椀の用意足らざる為め、皆家中より取寄せ、用済次第返却した位ですから、昔こう曰ふ器具を珍重した事は察せられます。私の宅なども貧乏な為であつたかも知れないが、正月、定紋つきの椀を用るは父親一人のみにして、余の家族はずつと悪るい器具ですましてゐました。今日は戦争中の成金気分が祟りをなして、一家族定紋つきの椀を揃へて自慢する家もあるらしいですが、藩政時代は定紋つきの椀は、大抵主人専用のもの以外に余分になかつたと申します。

『集古』といふ雑誌は、どこにて発行せられてゐますか、御序のとき御一報願上げます。希くは其の会費をもお知らせの程御依頼申上げます。

ドテは外陰部中、ふくらみたる縁をさして呼ぶのです。

『続群書類従』巻五十五、神祇部五十五、『祇園牛頭天王縁起』に「……天王語レ主曰、人以二慈悲一為レ本。今宵旅宿、感歎無レ極。汝名何。主答、蘇民将来矣。天王重曰。汝志誠深、依二貧家一可レ與レ玉。此玉者名牛玉。持二是玉一者、所願悉成就。無レ不二満足一。語與レ玉、竟則往二龍宮一。（中略）厥後天王相二見王子并后宮一。還二御豊饒国一。命時又被レ定。令三蘇民家御宿所当二彼説一、蘇民心中念願云。仰冀成二富貴人一。今一度天王被レ召二御宿一者、可レ為二生前大慶一。向二彼牛玉一。如レ向二尋常人一言二語所レ願之次第一。即時屋宅并七珍乃宝如レ意涌出。為二不思議思一処。当二其期一有二天王之御幸一。蘇民大開二喜悦眉一。云々」と、牛玉の咄が見えてゐますが、後に此の牛玉がどうなつたか、又転々として、是を持つ者所願悉成就せしめたかの咄は載つてゐません。

大阪の名物、二つ井戸の粟おこし屋に就て、こういふ咄があります。此の屋敷には、二つの井戸がありまして、昔、幽霊が出るとて誰もかりてなく、あき屋となりしを、此のおこしやの先代が借り受けしに、成程世人の噂するが如く幽霊出しかば、主人「我は人に恨みをうける身でなきに、何の迷ひで茲にさまようや」と訊ねしに、幽霊曰く「われは幽霊に非らず。誠は金の精なり。久しく此のうちの井戸に身をひそめ、世に出づる頼りなき故、かりに人の姿をあらはし、之を人に告げんとするも、皆恐れて近寄るものなし。汝、幸に気丈なれば、此を告るなり」と言ひて消えたれば、主人早速井戸を探りしに、金出でしと Toreasure Light と多少咄の筋を異にするも、面白い伝説と思ひます。

前週の日曜（二日）午後二時頃より、拙宅の裏手の小流をたどり、水源地の大谷といふ所まで、水面を見つめて歩きましたが、何等うるところなく、失望して帰りました。海図なくして航海すると同じ如うに、盲滅法に歩るいても仕様がないと思ひました。筑前朝倉郡金川村では、川海苔の苔養殖場があるそうですが、友人の咄によると、武蔵、青梅付近（玉川の上流）に、日光の大谷川と同じ如うに川のりが出来るそうです。

会社つとめの、読書時間が少ない関係上、ツイ無理な勉強して、私も眼の底が時々いたく、且かすむ事があります。ところが近所の者が、毎朝山椒の実を小粒づつ食しをれば、眼力が強くなると申しますので、一昨年から実行してゐます。方法は山椒の実を、味噌と醤油とだけにて煮つめて置けば、いつ迄も腐敗せず、風味もよく、食事中に少量だけくへばよいのです。神経のせゐか多少よいように思はれます。俗諺に「朝山椒夕薑（ハジカミ）」と曰ふのは、いづれも眼の養生になるから言ふのだそうです。昨年は此の実、一合が十銭でしたが、実に葉枝がついてゐますので、正味は一合よりズツと尠く、今年も売りに来てくれれば、よいと思つてゐます。

咄ちがひ、貴地方にて昼間夫婦のつとめするとき（漁民、夜間釣に出かけ性交する暇なき故）、来客に見舞れては都合悪しき故、此の時、表の戸に箕（ミノ）をたてて、来客の進入を遠慮せしむ風が御座いますか。九州にては豊前豊後にて此風あり。先般桂川氏に此の事を語りしに、同君曰く「五島地方にても此の事あり」と、何故箕を立てるかは不明なるも、かかる慣習ある事はよく人が語ります。序でにお訊ねしますが、何故箕を「ミノ」と申しますか、箕は其の形胴体に

似たり、箕は軀に通ずるのでありますまいか。御示教願上げます。

貴地方にて、農夫が牛の良否を鑑別するに、角の長短により、乃ち短き程よしとする風が御座いますか。山口県にては此の風あり。下関市外椋野にては、又牛の売買成立するときは、双方酒盛りして一杯やり、現金を授受をすると同時に、売手より牛の来歴・性質を語る風があります。

本日は是にて擱筆致します。私の語る事は、是といふお役に立つものなく、いつも恥かしく存じます。

草々

省三　頓首

南方先生　侍史

桂川氏も沖縄からどうやら帰りて、一旗あげる模様です。自分の趣味を商売の種とするらしいから幸福なる渡世法と思ひます。しかし土俗研究に浮き身をやつす者は、金儲けには、縁が遠い肌の者が多いのですから、旨くやつて行けばよいがと心配してゐます。なんと言つても現在の日本人は厚利主義で、地味の研究に没頭しようとする者は数へる外ないのですから、取越苦労かは知れませんが、心細く思つてゐます。どうか成功させたいものと存じます。

安来節の事、たづね合して見ましよう。